

〈論文〉

アダム・スミス研究を回顧する¹⁾

田中 秀夫

要旨 本稿は日本と英米のスミス研究を回顧する試みで、第二次大戦後の世界と日本の事件史とスミス研究がどの程度、関連しているかについて示唆を得たいという意図による。学史家も思想史家も自らの時代の世界や国家、あるいは社会の諸問題を多かれ少なかれ意識して研究している。問題意識はウェーバーが価値理念と呼んだものに対応するから、無限に多様であるが、第二次大戦後のスミス研究の場合、マルクス研究や政治学などと同じく、戦前の全体主義や天皇制ファシズムを克服し、自由で民主的な社会、「市民社会」をつくるという問題意識が有力なものとしてあった。一部にとどまらず、スミス研究はその迂回手段であった。

スミス研究者はスミス以後の200年以上の研究史が産出したあらゆる専門的課題に取り組むから、一見すると具体的な世界の出来事を意識しない、いわば普遍的・理論的な問題の研究もたくさん見られる。そして経済学史研究の場合は、トマス・クーンの言うパラダイムのあるいは通常科学的研究が多いであろう。その意味では事件史との相関性はあまり見られない。しかし、それすら歴史と社会に実は間接的に繋がっている。

キーワード アダム・スミス 第二次大戦後の研究動向 市民社会 スコットランド
歴史学派 スコットランド啓蒙 自然法 共和主義 シヴィック・ヒューマニズム

はじめに

本稿は日本のアダム・スミス受容ではなく、日本と英米のアダム・スミス研究を概観する試みである（ヨーロッパ大陸の研究動向については概観する能力がないので断念するほかない）。第二次世界大戦後の世界と日本の重要な事件史をピック・アップし、事件史としての歴史とスミス研究がどの程度、関連しているかについて、何らかの示唆を得たいという意図から概観してみようという試みである。残念ながら、これは概観であって、一部を除いて、個々の研究に

即して具体的に検討するという徹底的な調査ではないことを予め断らねばならない。

日本におけるスミスの受容史なら、いつだれが最初にスミスを読んだか、誰が翻訳を考えたか、実際にどのようにして翻訳が始まったかといったことを時系列的に問うことから始めなければならないが、研究となるとほぼ戦中から始まったと考えてよいだろう。英米の研究は、ずっと長い歴史があるが、ここでは第二次大戦以後に限定する。

そこで、まず明らかにすべきなのは、アダム・スミス研究においては、もとより研究者は自分の問題意識から研究するが、その問題意識は研究史のなかで形成された論点、あるいは、中長期の問題と関係する度合いが強く、個別具体的な事件、出来事と直接に対応することは少ないことである。経済学史という学問がスミス研究で生み出した固有の課題（トマス・クーン的に言えば通常科学的主題）というものがあって、研究者は多くの場合、その課題に取り組む。価値論、価格論、貨幣論、賃金論、利潤論、地代論、租税論、財政論等に関わる諸問題がそれである。それらは個別的な歴史問題や思想史の問題にも関連している。例えば、19世紀末のドイツで提起されたアダム・スミス問題——『道徳感情論』の利他的人間像と『国富論』の利己的人間像の間には差異があるのではないかという問題——や、スミスの投下労働価値論と支配労働価値論（構成価値論）の関連の問題、あるいはスミスはアメリカ問題に関して合邦論を支持したのか、それとも独立論を主張したのか、またスミスは常備軍論者であったのか、民兵論者であったのかといった問題がそれである。こうした問題は研究史のなかで争われてきた問題であり、こうした問題に取り組むのは経済学史研究あるいは社会思想史研究の一般的傾向でもあると言えるだろう。

さらにまたスミス研究は、経済学はいかにして形成されたか、スミスは当時の社会をどう見ていたか、スミスは資本主義社会を明確に把握していたか。『道徳感情論』はどういう書物か、スミスの講義した道徳哲学はどんな内容か。スミスは産業革命を知っていたか。さらには利己心と同感の関係、分業の概念や生産的労働の概念は何か、市場価格と自然価格、重商主義批判、重農主義との関連など様々な主題がある。その他、中国やインドをどう見ていたかといった問題もあれば、スミスの合邦論、スペイン継承戦争や南海事件についての見解、あるいはジャコバイトについての見解や、英仏七年戦争の捉え方等々、歴史的事件についてのスミスの見解も研究の主題となる。そうした様々なトピックや理論に関して先駆者や同時代人、後継者との影響関係や、継承と批判の関係もまた問題になる。したがって、研究者の時代の問題と直接関連する度合いは案外少ないように思われる。

スミスは道徳哲学者であったから、彼が取り組んだ問題のなかには時代を超えた問題、人間本性とは何か、徳や正義とは何か、人はいかに生きるべきか、といった時代を超えた普遍的な問題、超歴史的問題があることは言うまでもない。したがって、スミス研究者はこういう哲学的問題にも取り組むことになる。

しかし、大きな時代の括りとの関係は重要で、例えば内田義彦、小林昇、水田洋といういわゆる戦後トリオの場合、そのスミス研究は、戦後日本が直面していた課題、すなわち封建遺制

の除去、社会の民主化、目指すべき国民経済や市民社会の形成という問題と切り離せないと思われる。明示的に語られていなくても、戦前の天皇制ファシズムが何であったか、また戦後日本における天皇制はいかにあるべきかという問題も存在したと思われる。またとりわけ近隣諸外国、アメリカやソ連、あるいは中国との現状の経済関係について、また望ましい経済関係についての思念も恐らくはあったと思われる。トリオのスミス研究は、まさに時代の文脈のなかで形成された問題意識にしたがって遂行されたと言えるであろう。その他の、またその後の後進の研究者の場合も、歴史としての現代と無関係ではなく、中長期の課題を念頭に置いていることが多いのではないだろうか。その意味では、短期であれ、中長期であれ、多かれ少なかれ時代背景や時代の文脈が、スミス研究に影響していると言えるだろう。

戦前のスミス研究

戦前のスミス研究²⁾は、マルクスを意識しないものもあったが、1920年代からはもはやマルクス研究が自由に行えなかったために、その代替として行われる傾向があった。したがって、その場合のスミス研究は、日本社会の体制理解、発展段階把握（労農派）と特殊性認識（講座派）に関わって遂行されたと言えようが、天皇制と社会主義が（密かに）問題意識の奥に置かれていた。

日本資本主義論争（1930年代）の影響も大きかった。第3インター（コミンテルン）が日本共産党に与えた27テーゼと32テーゼが、論争の起点となった。日本は、絶対主義的な軍事的半封建的社会か（講座派）、それともブルジョア革命（市民革命）後の社会か（労農派）が最大の争点であった。1868年の明治維新は市民革命か、天皇制絶対主義を樹立した復古反動かが争われた（明治維新論争）。現状をどちらと把握するかによって、来るべき革命は、市民革命（講座派）か社会主義革命（労農派）かと考えられ、どちらが正しい把握なのかが論争されたのである。

日清戦争で台湾を領有し、日露戦争で南樺太を領有した日本は、次には朝鮮へ進出し、日韓併合を行い、そして30年代には満州へと帝国主義的侵略を行った。大日本帝国憲法と議会は、帝国主義と軍国主義、軍部の独走によって歪められ、無力になっていった。軍に抵抗できずに議会は翼賛議会となった。こうした日本の軍官僚＝国家官僚主導の軍国主義・帝国主義に対する批判意識を、スミス研究者も、良識派や社会主義者とともに、もっていたであろうが、その公然たる表明は治安維持法（1925年）によって封じられた。戦前の経済学者が直面していた問題は多数あったが、最大の問題は、こうして成立した当時の天皇制ファシズム、軍事政権による国家総動員体制をどう把握するかにあった。治安維持法によって研究の自由は制約されていたから、体制批判は封じられた。体制を批判したり社会主義的、共産主義的言説を説いたりするだけで拘束され、投獄される憂き目にあった。

戦後、GHQの占領を経て、スミス研究は体制問題と関連して展開されたが、占領軍による検閲が終わり、マルクス研究が自由に行えるようになって、スミス研究にも、新たに多様性がき

ざし始めた。多くの研究者がマルクス研究を目指したが、いくらかはスミスにも注目が向けられた。

戦後の学界を指導したのは東大、一橋、京大などであったが、東北大や名古屋大、九州大、大阪大なども続いた。もとより、早稲田や慶應も挙げなければならない。戦後直後の東大では、宇野理論と大塚史学の対立が際立っていた。硬骨の自由主義者であった河合栄治郎の門下の大河内一男は戦争末期に『スミスとリスト—経済倫理と経済理論』(1943年)を書いたが、生産力概念に注力した大河内の本書は、宇野より大塚に近い仕事であった。スミスとリストは一橋の高島善哉の主題でもあった。京都大学の白杉庄一郎はスミスとリストを論じ、同志社の住谷悦治はリストを論じた。人的資源を保全せよという、国家総動員体制のなかでの生産力論は、時局批判であったが、厚生省がこの時期に設立され、日本男子の身体が成長していないという事実を憂慮したという事実には照らす時、体制との妥協とも解釈できる一面があった。

全体主義との戦い、レジスタンス

資本主義的競争と帝国主義、ナチズム、ファシズムと大戦争によって、かつてない歴大な破壊、人的物的損失を被ったヨーロッパでも、戦後はマルクス主義が復活した。もはや社会主義や共産主義に期待するしかないかのように思った知識人も多かったが、ヒトラーと取引したスターリンは警戒しなければならなかった。インターナショナリズムはスターリンの下で一国社会主義へと歪曲された。

ドイツではイギリス、フランス、そしてアメリカへと亡命を余儀なくされたフランクフルト学派がマルクス主義とウェーバーに始まる社会学、フロイトの精神分析学を総合する社会理論を生み出した。戦中から戦後にかけて学派はナチズムと反ユダヤ主義の研究に取り組み、ナチズムの根源を人種思想、民族思想とドイツの「権威主義的家族」の伝統に求めるとともに、啓蒙をも断罪した。学派はやがてドイツに帰国する。1962年には第二世代のユルゲン・ハーバーマスが画期的な『公共性の構造転換』(*Strukturwandel der Öffentlichkeit*)を発表した。

ノルベルト・エリアスは「文明化」とは何かという主題に独自に取り組んだ(『文明化の過程』1939年、その他)が、それはナチズムを克服する道の模索でもあった。マールブルクのエルンスト・カッシーラーやハイデッガーの同僚であったカール・ヤスパース、スイスに避難したトーマス・マンそしてコロンビア大学のニュー・スクールに迎えられたハンナ・アレントもナチズムと対決した。アレントは、ナチズムとスターリニズムを含めて、全体主義の本質を解明することを生涯の課題とした。

フランスでは1920年代の末にマルク・ブロックとルシアン・フェーブルが始めた「アナール」の伝統が、経済史的、人文主義的なフランス・マルクス主義を生み出した。戦後になって、実存哲学者サルトルはマルクス主義を乗り越え不可能な思想と語り、ソ連を支持し、影響力を揮った。フランスはやがて実存主義(人間主義)から構造主義(反人間主義)の時代へと思潮が転換するが、マルクス主義哲学が影響力をもっていた。

イギリスでは、ゴランツ書店と「レフト・ブック・クラブ」³⁾で知られる、反ファシズム人民戦線に結集した労働党系と共産党系の知識人が1930年代にはプレゼンスを維持していた。この時期からラスキ、ストレーチー、ドップ、ヒルやヒルトン、ホブズボーム、E.P. トムスンなどのマルクス主義に依拠する歴史家⁴⁾が際立った研究を展開することになる。イギリスではマルクス主義哲学は主流とはならなかった。1936年にケインズの『雇用、利子、貨幣の一般理論』が出て大反響を呼ぶが、1944年には2冊の対照的な書物、ハイエクの『隷従への道』とボランニーの『大転換』が出ている。

アメリカでも1930年代からマッカーシズムの時代まで、社会主義がニューヨーク知識人を中心とする知識人の間で関心の的であった。アメリカは多種多様な亡命者を受け入れたので、戦後は、さながら思想の坩堝と化していた。アレントが『全体主義の起源』（1951年）を書き、『人間の条件』（1958年）を著したのはアメリカにおいてであった。

1930年代にソ連を訪問したアンドレ・ジッドもウェップ夫妻もスターリニズムの真相を見抜けなかったように、スターリンのラーゲリと粛清は当時は言うまでもなく、戦後になっても未だ闇の中に隠されていた。1930年代以降、長い間、ソ連は「地上の楽園」を目指しているという宣伝、思い込み、あるいは幻想が若者をとらえた。ラスキの弟子で『ビヒモス』（1942年）を書いたフランツ・ノイマンのように、ソ連の大義を信じた少なからずの知識人がソ連のスパイとなった。黙示録的な、あるいは千年王国的な夢が、ここでも悲劇を生んだ。西欧の共産主義者と同じく、日本の共産主義者もソ連に憧れ、惹きつけられるようにソ連に渡ったが、ラーゲリ（強制収容所）と血の粛清が待っているとは誰も知らなかった。

海外と同じく、わが国でも、目指す社会は、共産主義あるいは社会主義（体制変革）か、修正資本主義（配分政策）か、あるいは民主的な議会と言論出版の自由をもつ市民社会（民主化）として多様に語られた。天皇制は廃止論と存続論が対立したが、憲法の象徴天皇制が次第に定着した。天皇制の歴史も実証的な研究によって次第に明らかになっていった。東京裁判の正当性如何、天皇の戦争責任の有無は、長く論争された。マッカーサーとGHQは天皇を免罪したが、世論は分かれた。それが戦後啓蒙の時代であった。やがて冷戦の世界となり、思想はますます多元化し豊饒となる一方で、冷戦に縛られて人々の思考は硬直していくことにもなる。

1 戦後啓蒙とスミス研究, 1945~1960年

戦後啓蒙の時代を1945年から1960年までとし、この時代の重要な事件史と重要な思想書を、試みにピック・アップする（恣意性が免れないが）と、次のようになる。

【事件史 1945 終戦 GHQ (-52.4) 『世界』, 『展望』 創刊, 『改造』, 『中央公論』 復刊

1946 日本国憲法 20世紀研究所 悔恨共同体 (丸山真男) 『思想の科学』 創刊 東京裁判開廷

1947 アドルノ, ホルクハイマー 『啓蒙の弁証法』

- 1949 中華人民共和国成立 ハイエク『個人主義と経済秩序』
- 1950 朝鮮戦争⇒【東西冷戦】インド独立(ネルー首相) 米対日政策の転換
- 1951 サンフランシスコ講和条約(全面講和敗北)⇒(4月28日 日本国との平和条約が発効, 日本の主権回復)⇒日米安保条約(対米従属)
- 1956 ハンガリー事件 スターリン批判 人工衛星スプートニク 日ソ共同宣言 経済企画庁・経済白書「日本経済の成長と近代化」に「もはや戦後ではない」丸山真男『現代政治の思想と行動』上下(-57)
- 1957 梅棹忠夫「文明の生態史観序説」
- 1958 欧州経済共同体 Galbraith, *The Affluent Society*. Arendt, *The Human Condition*
- 1959 キューバ革命: カストロ, ゲバラ】

(1) 内田義彦『経済学の生誕』1953年

丸山, 大塚, 内田たち(清水幾太郎, 中井正一も含めて)の戦後の仕事を「戦後啓蒙」と名付けたのは杉山光信であった⁵⁾。敗戦と占領下での日本国憲法の成立, 朝鮮戦争から東西冷戦への転換, 日本の対米従属といった枠組みのなかで, 自由で民主主義的な社会, すなわち「市民社会」の構築を模索したのが戦後啓蒙であった。この時期に、「悔恨共同体」を形成した丸山真男, 清水幾太郎などの社会学者が, 学界のみならず, 論壇(夜店)をリードした。憲法, 政治, 軍事, 外交, 学術, 文化, 芸術, 宗教など, 多くのトピックに即して戦後体制が様々な角度から論じられた。川島武宜, 大塚久雄, 内田義彦などは夜店を開かずに, 専門的な研究に投入した。内田は市民サークルの講座に関係したから, それは丸山の夜店に対応するかもしれない。多かれ少なかれマルクスの影響を受けた知識人たちは, まだ見ぬソ連の模倣ではなく, 社会主義に希望を託しながら, 日本社会に資本主義ならざる, 自由な「市民社会」を形成することを課題として意識していた。

戦後啓蒙の一番手が丸山真男であったとすれば, 二番手は大塚久雄, 三番手は内田義彦であったかもしれない。戦前に遡る内田義彦のスミス研究は, 名著『経済学の生誕』となって1953年に未来社から出版された。マルクスによって批判的に継承されるラディカルな思想家としての斬新なスミス像を描いた『生誕』は, 多くの研究者や学生によって読まれた。内田は, 東亜研究所に1940年に入所して研究を開始したが, 戦後直後にはマルクス, レーニンを継承する理論に立って『潮流』に有名な「NNN」論文——「戦時経済の矛盾的展開と経済理論」——などを執筆した。出征を免れた内田は, その後, 丸山真男, 川島武宜, 木下順二等と親しく交流し, 大学だけではなく市民大学でも講義をして, 経済学を市民の教養にする方法を考えた。戦後日本社会をどうするか。いかにして民主主義社会, 「市民社会」を創るか。社会科学を通じて「市民社会青年」=主体を創り, 下から市民社会を形成するというのが一貫した内田の関心であり, そのための行動をしたのである。それは市民的共和主義と名付けてもよい行動である⁶⁾。

『潮流』論文から成長してなった⁷⁾『経済学の生誕』は「文明社会の危機意識」に捉えられた

ルソーとスミスを対決させ、スミスによるトーリーの権威の原理とウィッグの功利の原理の両面批判に注目し、スミスはヒュームのウィッグ全体主義を批判した思想家であるという、ラディカルなスミスを押し出した。特権的な重商主義と権力との癒着を批判するスミスは、現代的に言えば、カントリー的であり、共和主義的であるが、内田はブルジョア・ラディカル（急進派）と理解した。ウィッグ全体主義の概念は天皇制をいただく戦前の全体主義、天皇制ファシズムを仮託したものかもしれない。「文明社会の危機」は西洋の列強、英米などの帝国主義に追い詰められた天皇制ファシズム国家、日本の危機を仮託した概念であったと推定される。スミスが内田だとすれば、ヒュームとルソーは誰であろうか。

1953年の時点では、「コート・カントリー論争」の文脈でスミスを読むことは、いささか無理であった。ライオネル・ロビンズの妹のキャロライン・ロビンズの画期的な名著『18世紀のコモンウェルスマン』も未刊（1959年出版）であったから、スミスを共和主義思想との関係で理解することも、時期尚早であった。しかし、大ブリテンの重商主義体制に対決するラディカルな批判者、ブルジョア思想家スミスという把握は、一面での射っていた。

啓蒙思想家としてのスミスは、自らの世界の現状を批判して、漸次、自由で民主的な（あるいは独裁ではない）、活力ある社会を形成することを展望していた。農・工・商に従事する労働者の分業＝専門化による勤労と市場が商業社会を構成するが、スミスはもっと多くを求めた。しかし、彼はユートピアンではなかった。

スミスは人脈的にはウォルポールの盟友であったアイレイ、第三代アーガイル公爵の恩顧のもとにあった。スミスがグラスゴウ大学の教授職を捨て、グランド・ツアーの家庭教師を引き受けたバックルー公爵はアメリカ課税を推進したタウンゼンドの甥であった。しかし、そうした人脈にもかかわらず、為政者たちの旧植民地帝国政策と野心と腐敗を批判する点で、スミスはリチャード・プライスのような急進派に劣らず先鋭で根底的であった。こうした体制批判を展開した知識人としてスミスの姿が内田によって鋭くつかまれたのである。職人ワットとの交流も強調された。しかし、そのスミスもブルジョア的としてマルクスによって批判されねばならないというのが、変わらぬ内田の見解であって、その意味では内田のスミスはアンビヴァレントであった。

名著『経済学の生誕』の見事な問題設定、卓抜な文体、達人的な思想の掘り下げによって、輝かしい思想家としてスミスを浮かび上がらせた内田は、たくさんの支持者、後継者を生み出した⁸⁾。

(2) 小林昇のスミス研究

内田のライヴァルとしての小林昇の内田批判は厳しいものがあつた。内田の三歳ほど後輩であつた（しかし、東大では同級であつたらしいが会わなかつたという）小林は、フリードリヒ・リスト研究から出発した。マルクスの学史研究を尊重してはいたが、小林は、マルクス主義を空想的と見做していた。小林にはソ連への憧れがなかつた⁹⁾。小林は社会科学とイデオロギー

を峻別し、イデオロギーには信を置かないという態度を堅持した。小林は現実主義者であった。世界の現実は自由貿易と保護主義の対立であり、国家間の利害の対立である。世界には豊かな先進国と、貧しい後進国がある。資源に恵まれた国もあれば、資源に乏しい国もある。それでは富国と貧国は自然必然的に決定されているのかというと、そうではない。重商主義（固有の重商主義）のなかで次第に民富が蓄積され、産業資本が成立し、勤労が価値を生み、機械の導入によって工業が生産性を高める段階になれば、貧しい国も豊かになれる。それが基本的な小林の認識であった。

大塚史学の前期的資本と産業資本の峻別を内田と共に継承した小林は、勤労資本主義としての産業資本を決定的に重視する。産業資本はその生産性の優位によって剰余を生み出す。剰余がより多くの働き手の雇用をもたらし、いっそうの「民富」の蓄積を可能にする。しかし、民富を生み出す段階になった国民国家は、世界市場の中で競争をせざるを得ない。貧しい後進国は先進国に追いつき追い越すことを目指すのが、世界の現実である。そのために後進国は保護主義を採用する。歴史に照らして、自由貿易協定は先進国に決定的に有利である。フランス革命の近因となったイーデン条約は最たる例である。

後進国は保護主義で先進国に追いついたとき、自由貿易に転じることができる。後進国はいつまでも保護主義にとどまることはできない。保護主義を克服して、自由貿易に到達し、農工商の均衡の取れた国民経済を実現することが近代国家の課題である。小林はこのような国民経済と世界資本主義の理解をフリードリヒ・リストから学んだ。それぞれの国民が均衡ある国民経済を構築し、そのうえで対等の国際貿易を遂行し、相互に富裕に向かって前進する平和な世界経済を目指す。それが小林の望ましいと考えた展望であった。

太平洋戦争に兵卒として出征して九死に一生を得た小林は、ベトナムでの経験と戦後の徒労感と闘いながら、不滅の業績を築いた。それは（ステュアート研究を頂点とする）イギリス重商主義研究、リスト研究、スミス研究からなる。小林の表面に現れた学史研究は、一言でいえば、アダム・スミスを相対化することで、より公正なスミス評価を実現することにあつた。すなわち、イギリス重商主義とステュアート（『重商主義の経済理論』1952年）、さらにタッカー（『重商主義解体期の研究』1955年）とスミスを比較することによって、貨幣的経済理論とイギリスの生産力的優位の認識においてスミスに弱点があること、すなわちその点ではステュアートとタッカーがスミスより進んだ一面を持っているという理解にたどり着いた。

この小林の認識、とくにタッカーとスミスの関係をめぐる理解は、内田の反論を招いた。これを水田が命名した「内田・小林論争」¹⁰⁾と呼ぶ習わしであるが、論争とは言うものの、内田が本格的な対決を回避したという印象がある。ライヴァルの内田は小林に本格的に応答するのではなく、自らのマルクス研究と市民社会思想の掘り下げに傾注した。その結果、小林は営々たる学史研究に打ち込んだ。小林の研鑽は不滅の学史研究の成果をもたらした。

小林によれば、スミスは内田の言うようなブルジョア・ラディカルではない。大塚史学の前期的資本の概念を継承し（エートスの概念を切り捨て）た小林は、イギリスの重商主義に、前

期的な段階と「固有の重商主義」と呼ぶ段階¹¹⁾を区別すべきであって、後者は就業の確保や民富の蓄積を通じて産業資本の形成を準備したとし、『経済の原理』の著者ステュアートを固有の重商主義の終点と見做した。熊谷尚夫経由のケインズ受容がステュアートの言う為政者の創出する「有効需要論」の評価、経済への介入の必要性の認識を可能にした。こうして小林はスミスによって「死せる犬」とされたステュアートの復権を行ったのであるが、それは学問的公正さの追求でもあった。タッカーの経済論説にイングランドのミッドランド地方の金属機械工業の生産力的優位・先進性の認識を見出したのは小林のオリジナルな業績である¹²⁾。

内田、水田と違って、小林は経済学文献の外に出て思想史を追究することは回避した。小林は東京大学時代に教授たちの争いを目撃し、教授たちの学殖を疑った¹³⁾が、戦中、戦後の世界と日本で繰り返されたイデオロギー論争、それに伴う抑圧や脅迫を嫌悪した。

小林は1970年代に経済成長への懐疑を深めた。その後、グローバル化を進めた世界の経済問題を分析することは乏しかった。小林は、スミスの同感の理論も「マルチメディアとグローバル化と人間性の砂漠化の時代に」どこまで通用するであろうか¹⁴⁾、と書いた。経済成長を遂げた日本は、リスト的な国民経済＝正常国民を実現したわけではない。日本は工業を重視し、農業を置き去りにした不均衡な国民経済となった。自由貿易は比較優位を原則にするというリカード貿易論が妥当する国民経済を日本は生み出したということになる。工作機械、半導体、エレクトロニクスや自動車などの先端工業の発展に力を注いだ日本は急速な成長を遂げ、1980年代末に世界第二位のGDPを擁する経済大国になった。しかし、金融の国際化、変動相場制がバブルを生み、バブルとアメリカの保護主義の圧力に呑み込まれた日本は、急速に低成長時代に落ち込んだ。変動相場制とグローバル化は日本の経済力を引き下げた。日本の企業は多国籍化、グローバル展開を余儀なくされた。グローバル企業の時代は国民経済の安定成長を保証しない。しかし、先進国となった日本の国民が豊かになった以上、今度は後進国が富裕になる番であるとも考えられる。そうした逆転はヒュームやリストが教えていた。グローバル経済が進行する現代の問題を経済学史家はいかに扱えるであろうか。

(3) 水田洋のアダム・スミス研究

戦後啓蒙時代の一橋では高島善哉、大塚金之助、杉本栄一などが活躍し、教授たちは学生の尊敬もあつめた。高島の弟子であった水田洋の研究は、ボルケナウの戦地での翻訳やスミスの『グラスゴウ法学講義』の翻訳・出版（1948年）などから始まった。水田がユニークな労働者＝素人研究者の田中吉六の『スミスとマルクス』（真善美社、1948年）を評価したのはいささか意外かもしれない。水田の華々しい活躍は、戦後ほどなく始まっており、ボルケナウ『封建的世界像から市民的世界像へ』（これはマニュファクチュア時代の機械論哲学の研究である）邦訳の出版、ホップズ『リヴァイアサン』とスミスの翻訳、ホップズ研究の『近代人の形成』（1954年、これは【利己的个人】の発見であった）と『アダム・スミス研究入門』（1954年）の出版などを挙げることができるが、この時期にはスミスに重点が置かれていたというよりホップズ研

究により注力されていたように思われる。その点に水田の独自性もあるが、さらに水田は先輩の内田、小林と違って、海外でも活躍した点が重要である。すなわち、水田はブリティッシュ・カウンシルの留学生として英国（グラスゴウ大学）に渡り、ミーク、ホブズボーム、ヒルなどのマルクス主義歴史家・思想史家と交流し、豊富な海外情報に接しながら、若き日の研鑽を積んだのである。その成果の一端は『社会思想史の旅』（1956年）、ミーク『労働価値論史研究』邦訳（宮本義男との共訳、1956年）などに見られる。

水田は、その後、多くの仕事を行いながら、一貫してホブズ、スミス、マルクスを並行的に研究した。水田は独特の【伝記的思想史】を社会思想史の方法として実践した。社会主義を民主主義の徹底と理解する水田は、自身は社会主義者であり、マルクス主義者だと語ることがあるが、その仕事において次第にスミスの比重が大きくなったように思われる。水田は「わだつみの声」の会の会長や市民運動にも参加し、行動する知識人として長い人生を送って来た。しかし、常に学問的研鑽を継続した水田は、その結果、国際的フィールドでの研究とスミスの全体への肉薄において、他の追従を許さない成果を挙げている。

戦中から戦後にかけての京都には、河上肇が追放されてから、高田保馬、柴田敬、石川興二、白杉庄一郎、出口勇蔵、青山秀夫、河野健二、杉原四郎、森嶋通夫などがいたが、特にスミスへの関心を示していたのは白杉庄一郎である¹⁵⁾。また河上肇の弟子である堀経夫は東北大学から大阪商大、関学へと移り、ミルを中心として幅広い仕事をし、杉原四郎や久保芳和などを加えて関西の学史研究の拠点を構築した。スミス研究では大道安次郎¹⁶⁾が多産的であったが、それはマルクスの影なきスミスとしてユニークであった。

(4) アダム・スミスの会（1949年発足）

経済学史学会の設立に先立って、1949年に発足したアダム・スミスの会は、大河内によれば、スミスの愛好者のサロン風の集まりとして始まり、初代会長は矢内原忠雄、幹事に大河内一男と大道安次郎が就任し、事務局は矢内原研究室に置かれた¹⁷⁾。会長は矢内原忠雄から大河内一男、小林昇、水田洋と受け継がれて今日に至っている。そして1955年にアダム・スミスの会『本邦アダム・スミス文献』（増訂版1979）が出る。その後、スミスの会は、後に触れるように、古典文献の翻訳などの重要な活動を行う。

(5) 未来社の貢献

戦後啓蒙の時代に未来社が出版事業を通じて、戦後啓蒙の担い手となった若手研究者の研究を意欲的に出版したことは重要な貢献であった。創業者の西谷能雄（京都学派の西谷啓二の従弟）は京都の弘文堂を経て、東京で創業したのであるが、京都時代に馴染みとなった丸山真男と内田義彦の主著を出版し、また福島詣でによって小林昇と小林学校の俊英の力作を次々と刊行し、さらに若手の発掘は全国へと広がっていった。西谷能雄は、アダム・スミスやジョン・ミラーなどスコットランドの思想家の浩瀚な著作を刊行したストラーンやマリーなどスコット

ランド出身の出版者の貢献を彷彿させるものがある。

2 高度成長期のスミス研究, 1960~1970年

- 【事件史 1960 安保改定反対運動⇒樺美智子の死 岸退陣⇒池田勇人「貧乏人は麦を食え」、所得倍増政策（下村治立案）⇒60年代高度成長 公害列島（水俣病, イタイイタイ病, 四日市喘息）⇒エコロジー・ブーム ローマ・クラブ『成長の限界』
- 1961 小田実『何でも見てやろう』
- 1962 キューバ危機 中ソ論争 レヴィ=ストロース『野生の思考』*La pensée sauvage* ハーバーマス『公共性の構造転換』
- 1963 成田空港問題⇒（1967頃から反対運動高揚 国論二分）トムスン『イングランド労働者階級の形成』
- 1964 東京オリンピック 東海道新幹線 日本 OECD 加盟 期待される人間像 PLO マルクーゼ『一次元的人間』
- 1965 日韓基本条約 ベトナム北爆開始（⇒1973年パリ協定）
- 1966 文化大革命 団塊世代・大学入学 ベトナム反戦運動 新左翼
- 1967 東南アジア諸国連合 ガルブレース『新産業国家』
- 1968 大学紛争 パリ5月革命 チェコ事件 エンプラ佐世保寄港】

1960年代の事件史を回顧すると、経済の高度成長の時代であり、東京オリンピックと新幹線の開通がある一方、公害が多発し、成田空港問題が登場し、高度成長のつげが払われ始めていることがわかる。また国際的にはベトナム戦争、中国の文革、大学紛争、パリ5月革命、チェコ事件など大きな犠牲を伴った事件が起こっている。5月革命やチェコ事件、学園紛争などの多くの事件が相継いで起った1968年は画期的な年であったかもしれない¹⁸⁾。この時代にスミス研究はどうだったか。

(1) スコットランド歴史学派の概念

1960年代に「スコットランド歴史学派」の概念が水田洋によって紹介され、大野精三郎¹⁹⁾・佐々木武・山崎怜などの研究によって広められた。この概念はパスカル、ミーク、マクフィーたちによって形成されたのであるが、確かに17世紀の自然法思想、あるいは共和主義思想には歴史主義的な要素は乏しい。共和主義に時間概念がないというわけではないが、それは腐敗と革命の繰り返しという循環的時間概念である傾向が強かった。社会の歴史的变化を認識するには新しい歴史意識が必要である。18世紀になると、社会の歴史的發展、あるいは変容という認識が登場する。共時的社會認識から通時的社會認識へと認識枠組みが変化する。いわばパラダイム転換が起る。歴史学派は19世紀にドイツに登場するに先立って、スコットランドに登場し

たのである。

そして彼らは学派には狩猟→遊牧→農耕→商業という社会発展の4段階論があるという発見を提出した。パスカルが示唆したテーゼを本格的に証明したのがミークであった。そうした研究成果に水田と後進の世代は注目したが、スミスやヒュームは孤立した思想家だったのではなく、スコットランド歴史学派と称することのできる研究仲間と共に新しい社会認識を獲得していったことが、明らかにされたのであった。もとより、スコットランド学派という概念はつとに存在していた²⁰⁾。しかし、それは哲学の学派、コモン・センス学派として認識されていた。

ざっとした印象にすぎないが、1960年代の英米には、それ以外の注目すべきスミス研究はあまり見られないように思われる。公共選択理論による教育論で知られるE・G・ウェストたちがアダム・スミスにおける労働の疎外、人間疎外の思想に注目した²¹⁾のは、この時代から1970年代にかけてであったことも付言しておこう。

(2) 内田、小林の活躍

1961年には内田『経済学史講義』、小林『経済学の形成時代』が出る。両著は大学のテキストとして使われたものと思われる。1965年にはスミスの会の『アダム・スミスの味』が刊行され、1966年には内田義彦『資本論の世界』が出た。これはもちろんマルクス研究であってスミス研究ではないから、ここで触れるのは脱線であるが、内田は労働日をめぐる闘争によってはじめて価値法則が貫徹するというユニークな、しかし当然とも言える価値論理解を押し出した。また1967年には『日本資本主義の思想像』が出る。これもスミス研究ではないけれども、問題意識には関連があって、ここで内田は「市民社会青年」、「力作型」、「コネ型」といった概念を用いて、日本の独自の人間像を彫琢した。またその翌年の1968年には、小林昇『私のなかのヴェトナム』が出版されたが、また内田の強い影響を受けた平田清明の『市民社会と社会主義』も刊行され、後者は学界を超えて話題となった。これは大学紛争、5月革命、チェコ事件といった事件で浮かび上がった、体制を超えた「市民社会」形成という課題があるという問題意識の作品であった。

(3) 田中敏弘のマンデヴィル研究

スミスが『エディンバラ評論』の学界展望で注目していた思想家であるバーナード・マンデヴィルについては、つとに碩学の上田辰之助『蜂の寓話：自由主義経済の根底にあるもの』（新紀元社、1950年）が出ているが、1966年に本格的な研究として、田中敏弘『マンデヴィルの社会経済思想』が刊行された。これはアメリカでの学位論文がもとになっている。トリオ以後の重要な研究として、本書はマンデヴィルの多数の著作を包括的に分析し、スミスの自由主義経済思想への道にマンデヴィルを位置づけるものであるが、1970年の『社会学者ヒューム』も同様の狙いであった。教授は経済学史を学説史として洗練するという——小林昇的な——姿勢を貫いているように思われる。教授は自らスミス研究に深入りすることは回避し、視野を古典

派前後から現代経済思想，特にアメリカの制度学派，J・B・クラークやヴェブレン等へと向けている。

（４）水田洋のスミス研究

この時期に水田洋の重要な成果が登場する。1967年の「同感概念の成立」と1968年の『アダム・スミス研究』である。前者は同感の【冷却作用】に注目した画期的な論文として定評があり、後者はスミスをスコットランドの文脈に位置づける試みであった。水田が注目したように、当事者の感情の冷却作用は重要であるが、観察者はどうなのだろうか。観察者にも冷却作用が起るのだろうか。観察者も当事者と同じく最初は感情が高揚するのではないだろうか。当事者と観察者（傍観者）の想像力の働きによる同感（無言のコミュニケーション）は、当事者の冷却作用だけからなるのではない。観察者が当事者に同感するというのは、それなりの感情の自発的あるいは自然な（自然発生的な）励起なので、感情の高まり、言ってみれば高揚作用であろう。最初は当事者も感情が高まっている。そして観察者を意識すると冷静になる。感情が冷却する。当事者と観察者は想像上の立場の交換（相手の感情への移入）を通じて、自然に起る感情の冷却化と感情の高揚を通じて、（同じレベルの？）同じ感情に接近する、そして次には観察者の感情も冷却する（所詮他人のことだ）とスミスは主張しているのではないかと思う。しかし、このようなメカニズムを推定ないし理解することはできても、実証することは困難であろう。ただし、この全体を包括して、同感の冷却作用と要約することは妥当であろう。

スミスの『道徳感情論』は、最初から超越的原理として善、道徳や正義を提示する理論ではないことが重要で、主観主義、相対主義を免れないが、むしろ、超越的な価値を棚上げにして、どこにでも、いかなる文化圏にも適用できる道徳の原理を考えた点に画期性がある。デカルトはコギトから出発して神へとたどり着くが、スミスの場合も主観的な同感から、世論を批判して、最後に良心としての半神への訴えにまで進むから、ある程度はデカルトと似ているかもしれない。しかし、スミスの場合は良心どまりであるから、スミスは超越的原理を排除したと言える。道徳理論としてはそこにトマス・リードたちが不安を抱き、コモン・センスの概念を超越的な概念として導入しようとした理由がある。カントは定言命法であるが、スミスの良心とは程遠い。

（５）アダム・スミスの会の活動

アダム・スミスの会が「初期イギリス経済学古典選集」を刊行し始めたのが、大河内一男会長のこの時期である。必ずしも表に出ていないが、この選集の刊行に寄与した小林昇の貢献はきわめて大きいものがある。小林は多くの書目の監訳をした。

書目10点13冊を年代順に挙げておこう。①マン『外国貿易によるイングランドの財宝』渡辺源次郎訳，1965年。②バーボン＝ノース『交易論』ダヴナント『東インド貿易論』久保・田添・渡辺訳，1966年。③チャイルド『新交易論』杉山忠平訳，1967年。④ヒューム『経済論集』田

中敏弘訳, 1967年。⑤タッカー『政治経済問題四論』大河内暁夫訳, 1970年。⑥バークリ『問いたです人』川村・肥前訳, 1971年。⑦デフォー『イギリス経済の構図』山下・天川訳, 1975年。⑧ハリス『貨幣・鑄貨論』小林昇訳, 1975年。⑨ロック『利子貨幣論』田中・竹本訳, 1978年。⑩ステュアート『経済学原理』三分冊, 加藤一夫訳, 1980-2年(これは抄訳)。

(6)1968年と異議申し立て

1968年は英米, 西ヨーロッパ, 日本で新左翼各派と若者を中心とする, ベトナム反戦と異議申し立て運動が激化し頂点を極めた年である。アルチュセールやフーコー, ルフェーブルなどフランス・マルクス主義, あるいはマルクーゼやハーバーマスの日本への影響もあった。

ドブチェクに率いられたチェコの「プラハの春」がソ連の戦車に圧殺されるという事件も起こった。情報は十分ではなかったが, 市民社会論者ならずとも, 衝撃を感じた人が多かったであろう。加藤周一は『言葉と戦車』を書いた。水田洋『アダム・スミス研究』がこの年に出たことは, そういった大事件に関係ないように見えるが, スミスのような市民社会思想, 同感の思想が社会に浸透する必要があるというメッセージがあったかもしれない。

パリ5月革命の主導者は, その後の社会党政権に加わり, フランス社会の改革を推進した。これは先進国の市民社会形成にとって転機の年と評価されることもあるが, スミス研究からは「同感」ないし「共感」の語彙が, 一部にかもしれないが反体制運動, 市民社会運動に伝えられた。

3 ゆたかな社会 ポスト高度成長, 1970~1980年

- 【事件史 1970 万博 共産主義者同盟赤軍派よど号ハイジャック⇒拉致 安保自動延長
 1971 印パ戦争 中国国連代表権 ニクソン・ショック=中国訪問と金ドル交換停止
 1972 沖縄復帰 田中角栄「日本列島改造論」 清水幾太郎『倫理学ノート』 Rawls, *Theory of Justice*
 1973 オイル・ショック 変動相場制
 1974 ハイエク, ノーベル賞 ミュルダールと同時受賞
 1975 ボル・ポト(76年数百万人虐殺) ロッキード事件
 1976 ハイデッカー, 周恩来, 毛沢東死去⇒華国鋒首席 『国富論』刊行200年
 1977 ロンドン・サミット 赤軍ダッカ・ハイジャック
 1978 日中平和友好条約 成田空港開港
 1979 サッチャー保守党内閣(-1990)⇒民営化 ボーゲル『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(*Japan as No.1*) 米中国交正常化 スリーマイル島原発事故 ソ連アフガニスタン侵攻 イラン, イスラム革命(ホメイニ)】

1970年代はニクソン・ショックがあり, オイル・ショック, 沖縄復帰, そして変動相場制が

始まり、ボル・ポト（クメール・ルージュ）による虐殺、日中友好条約、スリーマイル島原発事故、ソ連のアフガニスタン侵攻などの多数の大事件があった。経済学史家もこういった事件に注目したに違いない。オイル・ショック後の1973年に小林昇は低成長の勧めを説いた。脱原発が資源物理学者の槌田敦や、室田武等によって提唱された。彼らの主張の先駆性は2011年3月11日の東北関東大震災と福島第二原発の暴走が如実に示した。1991年の対談のなかで、小林は「およそコントロールの要素のない資本主義なんて考えられない。・・・現に我々が直面している問題は、社会主義と資本主義とのどっちが勝ったとか負けたとかいう問題ではなくて、・・・人類が生存できる環境をもちうるかどうかということが問題なんで、その問題になってくると、個人の利益が総合されると一番いい結果が出てくるという考え方は決して通用しない」²²⁾と語った。

（1）内田、小林のスミス研究

内田義彦は『社会認識の歩み』を1971年に出版し、分析的方法と【理解的方法】という二つの方法を社会認識では駆使することができると主張した。これはウエーバーの主張とほぼ同じである。また内田義彦は『学問への散策』を1974年に刊行する。こうして内田は専門的な学史研究から思想史一般の方向へと転じていく。

一方、小林昇は『国富論体系の成立—アダム・スミスとジェイムズ・ステュアート』を1972年に出版する。教科書としても利用できた書物であるが、ここでは労働価値論の破綻に直面することによって、アダム・スミスは、商業社会が実は地主・資本家・労働者の三階級が構成する資本主義社会であるという明確な認識に到達したという解釈が示された。

また1972年には大河内一男編『国富論研究』I～III（筑摩書房）が刊行されたが、これはこの段階の日本のスミス研究の集大成とも言える包括的な研究である。

（2）佐々木武の独創性

1972年から翌年にかけて、佐々木武「『スコットランド学派』における『文明社会論』の構成」と題する論文が『国家学会雑誌』に連載される（1972-73年）。これは東京大学法学研究科の博士論文であるが、政治思想史をフィールドとする研究者が「文明社会論」という枠組みから「スコットランド歴史学派」の文明社会史に迫ったユニークな業績である。スミス・プロパーの業績ではないが、スミスに関連のある独創的な研究として注目された。少し後に、経済学史家から評価された佐々木は『国富論の成立』（1976年、後出）にもケイムズ論を寄稿している。佐々木は小林昇のように古版本を読んだ研究者である。その学風は小林昇、水田洋、杉山忠平、津田内匠、永井義雄などの仕事に加わって、経済学史学会の学風の形成に寄与したのではないだろうか。

(3) グラスゴウ版のスミス著作集の刊行

『国富論』刊行200周年を記念して新版のスミス著作集が刊行され始める。Glasgow ed. TMS,WN (Oxford U.P.) が刊行されたのは、1976年で、目玉は初めて刊行される新発見のグラスゴウ大学での法学の講義の学生によるノート『法学講義ノート』(Aノート)であり、それは既知のBノートと合冊で1978年に出版された(Glasgow ed. LJA, LJB)²³⁾。こうして2種類の講義ノートが利用可能となり、本格的な法学講義の研究が始まる。スミスは1751年から13年ほどグラスゴウ大学に在籍して講義をしたのであるが、道徳哲学教授として自然哲学、倫理学、法学、経済学の4部門の体系的な講義をしたということが、新著作集の刊行で、従来にも増して、いっそう確実にされた。

(4) 海外のスミスまでの研究の隆盛

1971年にポーコックは論文集を出し(Pocock, *Politics, Language, and Time*)、そのなかで「シヴィック・ヒューマニズム」(Civic Humanism, 以下CH)の概念のトルソを述べていた。それが仕上げられて大著『マキアヴェリアン・モーメント』(J.G.A.Pocock, *The Machiavellian Moment*)²⁴⁾(以下【MM】)になるのは1975年のことである。これについてはすぐ後に述べる。

1971年にはイグナティエフの『見知らぬ人の必要』(Michael Ignatieff, *The Needs of Strangers*)とロールズの『正義論』(John Rawls, *Theory of Justice*)も出たし、その翌年の1972年にはホルンダーの近代経済学からのスミス研究(Jacob Hollander, *The Economics of Adam Smith*)²⁵⁾が出版された。いずれも問題作であるが、ロールズが版を重ねて古典になる一方、イグナティエフも一部には注目を浴びた。彼の問題意識は【スミスとルソー】、【市場と共和主義】と要約できる。邦訳の出版は例によって遅い²⁶⁾。前者には内田説が再論されたという趣があつて、内田義彦の世界的な先駆性を確認できるであろう。内田に「共和主義」の語はないが、しかし、彼の市民社会や市民社会青年の概念には、多分に共和主義のニュアンスが感じられる。なおルソーとスミスはホントの遺書の書名ともなった(Istvan Hont, *Politics in Commercial Society: Jean-Jacques Rousseau and Adam Smith*, Harvard U.P., 2015)。

(5) ポーコックのインパクト

この時期にポーコックとフォーブズの画期的な著作が出版された。前述の【MM】とフォーブズの『ヒュームの哲学的政治学』(Duncan Forbes, *Hume's Philosophical Politics*²⁷⁾)である。両著は奇しくも同年に刊行されたが、同じ世代の二人はケンブリッジで相前後して歴史家バターフィールド(Herbert Butterfield)の指導を通じて知り合っていた。ポーコックは『古来の国制と封建法』(*The Ancient Constitution and the Feudal Law*, 1957)について研究し、フォーブズは国教会自由主義の歴史観を研究していた(*The Liberal Anglican Ideas of History*, 1952)から、研究関心に接点もあったが、二人の親密度は分からない。先輩のフォーブズは処女作を先行して出版し、ケンブリッジのポストを得たが、ポーコックはアメリカにポストを求めることになっ

た。

ハンス・バロンのルネサンス研究やキャロライン・ロビンズの『18世紀のコモンウェルスマン』（Caroline Robbins, *The Eighteenth-Century Commonwealthman*, 1959）などの共和主義研究を介して、「シヴィック・ヒューマニズム」【CH】の鉤脈に出会ったポーコックはヨーロッパの伝統としての共和主義の伝播と変容の歴史を掘り起こすことになる。それが大著 MM であり、1975年に刊行されるや、難解ではあるが、政治思想史と社会思想史の画期的な研究として注目され、必読の書物となっていく。フィリップスンやディキンソン、ホントやイグナティエフ、ジョン・ロバートスンなどはポーコックを読みながら、自らの研究主題に取り組んでいくのである。

（6）ダンカン・フォーブズの自然法研究

ダンカン・フォーブズのヒューム、スミス、ミラーの自然法研究は、マンデヴィルとヒュームに通じた田中敏弘によっていち早く紹介された²⁸⁾。

フォーブズは最初「科学的ウィッグ主義」、それを再検討して提案した「懐疑的ウィッグ主義」の概念で、三人の思想を包括的に把握しようとした。特に「意図せざる結果」の思想に「懐疑的ウィッグ主義」の特徴を求めた。論文刊行に時代的なすれ違いがあるので、フォーブズがポーコックと「シヴィック・ヒューマニズム」【CH】を意識して退けたのかどうかは分からない。しかし、戦後のケンブリッジで二人は接触しており、フォーブズはつとにポーコックの CH を知っていたと思われる。「理想の共和国案」を引き合いに出すまでもなく、ヒュームに共和主義思想の遺産が流れ込んでいることは明らかなので、ヒュームの思想分析から共和主義、CH の語を一掃するという頑なな態度は、思想史分析を貧しくする態度であろう。CH 論をポーコックがスコットランドへ適用する可能性を検討した論考²⁹⁾を刊行するのは『富と徳』（1983年）においてなので、フォーブズの論文が出た後のことである。

フォーブズの見解は、ハイエクの真の自由主義を「自生的秩序」の思想とし、その源泉をマンデヴィルとヒューム、さらにはイングランドのコモンロー思想、サー・マシュー・ヘールに遡る見解³⁰⁾と触れ合っていることは明らかであろう。

こうしてケンブリッジのフォーブズを中心として、またポーコックを直接のメンターとして、ホントとイグナティエフのスコットランド啓蒙の研究が始まる。

（7）「スコットランド啓蒙」の概念の確立

1976年の啓蒙思想国際会議（セント・アンドルーズ）においてセッションが持たれ【スコットランド啓蒙】の概念が認知された。この年は『国富論』出版200年を記念していくつかの催しがあり、経済学史学会編『国富論の成立』が刊行された³¹⁾。また有名な内田・小林・水田鼎談「私たちのスミス研究」が、『東洋経済』『国富論200年特集』の紙面で行われた³²⁾し、スミスの「傲慢」Pride 批判に注目した星野彰男『アダム・スミスの思想像』が出たのもこの年である。

(8) ミークの仕事

1976年にはミークの独創的な『社会科学と高貴ならざる未開人』(Ronald L. Meek, *The Social Sciences and the Ignoble Savage*³³⁾が刊行された。これはいわゆる「生活様式」の4段階理論【4 Stages Theory】の起源と形成史を詳細に研究したものである。そのきっかけはスミス法学講義新ノートの編集にあった。ミークはマルクスの「生産様式」の発展段階論の原型をスミスたちの4段階理論に見出し、その源泉を1950年代のスミスとチュルゴにまで遡及したのであった³⁴⁾。後に、この問題を受け継ぎ、ホントはプーフエンドルフまで遡ろうとした。

ミークは1977年に来日し、各地で講演を行ったが、この時期までのミークのわが国への影響は大であった。

(9) ウィンチの仕事

グラスゴウ版『法学講義』が刊行された1978年にドナルド・ウィンチ『アダム・スミスの政治学』(Donald Winch, *Adam Smith's Politics*)³⁵⁾が出版された。ポーコックのMMとシヴィック・ヒューマニスト・パラダイムの影響を受けたウィンチ教授は、スミス政治学をCHとして読む嚆矢となった。その影響は1980年代に我が国にも浸透したが、ポーコックのMMの受容と重なる。MMは難解な作品で、容易に近づけなかった。ウィンチはCHより自然法【NL】のほうがスミスにあってより重要ではないかという批判を受けて、トーン・ダウンした。ポーコックとウィンチの影響下、シヴィック・ヒューマニストとしてのスミス解釈はわが国でも遅れて登場するが、【自然法思想家としてのスミス】に比べると、ごく少数派にとどまった³⁶⁾。

1979年にはアンドルー・スキナーの『社会科学の体系』(A.S.Skinner, *A System of Social Science*)³⁷⁾が刊行された。本書はスミスの道徳哲学を社会科学の体系として包括的に解釈する力作であった。

4 自由主義=保守の時代 民営化 ソ連の破綻, 1980~1990年

【事件史 1980 ヴェネツィア・サミット ポーランド, 連帯 加藤周一『日本文学史序説』

1981 レーガン第40代大統領⇒レーガノミックス ミッテラン大統領 (初左翼政権)

1982 フォークランド紛争

1983 第2次サッチャー政権 日本エントロピー学会 (事務局: 京都)

1985 ゴルバチョフのペレストロイカ 男女雇用機会均等法 NTT民営化 プラザ合意 (G 5, 蔵相・中央銀行総裁会議) ⇒為替相場への協調介入

1987 第3次サッチャー政権 国鉄民営化

1988 リクルート事件 ブッシュ第41代大統領 日米構造協議⇒ (公共投資拡大450兆円, 大店法, 独禁法改正; 米=財政赤字削減, 競争力)

1989 天安門事件 ベルリンの壁の崩壊⇒東欧革命 フクヤマ「歴史の終わり」⇒92『歴史の
終わりと最後の人間』】

(1) 日本の研究³⁸⁾

1980年代の日本のスミス研究は、相変わらず古い世代の活躍が目立った。まず1981年に内田義彦『作品としての社会科学』が刊行された。内田義彦は類似の系統の著作『読書と社会科学』を1985年に出した。これは市民社会としてまだ未成熟の日本社会に社会科学を定着させるという意図の実践であった。そして1984年には、アダム・スミスの会『続アダム・スミスの味』が出版され、また小林・杉山編の論文集『自由主義と保護主義』とD.ステュアート『アダム・スミスの生涯と著作』邦訳³⁹⁾が刊行された。

『自由貿易と保護主義』は18世紀以来の論争テーマであり、先進国の自由貿易論と後進国の保護主義の論争⇒抗争は、しばしば戦争を引き起こすことになるが、国家利害・国家理性の絡んだ国際関係をいかに調停できるのかという難問に取り組んだものである。著者たちは後進国の保護主義の主張に合理性と正当性を見出している。先進国の自由貿易主義が後進国の保護主義に譲歩しないと、後進国の経済が大きな打撃を受ける。イーデン条約によるフランス製造業の打撃はその格好の事例であり、それがフランス革命の引き金となったことが、強調された。本書の主題は解決済みではない。第二次大戦後の西側は自由貿易を基軸とする GATT = IMF 体制であったが、それは個別的な国家間、産業間の利害対立を緩和する方針のものであっても、関税の完全撤廃は容易に実現できなかった。本書が現代の自由貿易と保護主義の対立を意識したものであることは明らかであろう。

新世代からは篠原久『アダム・スミスと常識哲学』が1986年に刊行された。本書はトマス・リードの『道徳感情論』(TMS) 批判とスミスの応答と TMS の改訂を資料的に解明した独創的な業績であるが、ケイムズ卿の民兵論なども取り上げている。有名な学派の【コモン・センス】が本格的に取り上げられたのも本書によってである。

ちなみに、ハイエクのアンソロジー『市場・知識・自由』が出た⁴⁰⁾のも1986年である。本書はハイエクの重要な自由主義論文を翻訳したものとして注目され、遅れて我が国のハイエク・ブームへとつながっていく。編訳者にはその意識が明確にあったわけではないが、すでにレーガン、サッチャーが登場して数年が経過しており、わが国においても彼らの背景にいたハイエクの思想に関心がもたれるのは時間の問題であった。概して、翻訳は歓迎されたが、ケインジアンからの反発も招いた。

1988年には田中正司編『スコットランド啓蒙思想研究』が刊行された。「スコットランド啓蒙」を主題とした最初の論文集である。同じ年に、田中正司『アダム・スミスの自然法学』が出た（第2版は2003年）。ここではスミスの法学講義の LJA から LJB で篇別構成が逆転しているという問題が検討され、それはハチスンへの依存から独立へというスミスの思想の展開の結果であったという独自の説が提唱された。その成否はまだ確定していないと思われるが、貴重

な研究であった。

スミスの自然法に集中していた田中正司のスミス研究は、この頃から次第に自然法から【自然神学】へと力点を移動させる。経験科学としての社会科学は自然神学から解放されることで自立するのであるから、社会科学の成立の前提へと力点を移し、自然神学を重視するのは正しい研究の方向性であるかどうか、疑問がある。

1989年に我が国では、田中敏弘編『スコットランド啓蒙と経済学の形成』が出版される。これは「スコットランド啓蒙」を焦点とする論文集であった。

(2) ケンブリッジ学派の『富と徳』の衝撃

英米の動向であるが、1982年にキャンベル、スキナー編の『スコットランド啓蒙の起源と本質』(Campbell & Skinner eds., *The Origins and Nature of the Scottish Enlightenment*) が刊行された。これは経済史も含む包括的な論文集であるが、しかし、その翌年にホント、イグナティエフ編著『富と徳』(Istvan Hont & Michael Ignatieff eds., *Wealth and Virtue; The Formation of Political Economy in the Scottish Enlightenment*)⁴¹⁾が出たことによって、本書は霞んでしまったかもしれない。『富と徳』によれば、『国富論』の中心的関心は正義の問題であり、「所有の不平等と所有から除外された人々への十分な生活資料の供給を両立させうる市場機構を見出すことであった」⁴²⁾。彼らはE・P・トムソンの生存権の優位を意味する民衆の「モラル・エコノミー」の思想を用例がなく根拠が弱いとして退け、スコットランドの経済学(Political Economy)⁴³⁾の画期的意義は商業社会が「富と徳」を両立させるという認識を確立した点にあるとした⁴⁴⁾。すなわち、本書の主張によれば、【富と徳】の両立問題こそスコットランド啓蒙の共通問題であり、自然法と共和主義の伝統を継承したスコットランドの啓蒙知識人は道徳哲学、法学、経済学を展開するなかで、この問題に取り組んだのである。師匠格のフォーブズとポーコックに触発されたこのホントとイグナティエフ編著(二人は36歳であった)は画期的な研究で、英米のみならず、わが国にも大きな影響を及ぼした。

富と徳の両立というのは、18世紀以降、体制を問わず、時代を超えて、常に課題となってきた。近代史・現代史はまさに「富と徳」の実現を目指してきた歴史であった。富と徳を文明社会のみならず貧しい地域に普及するにはいかにすればよいのか。富を得たものが腐敗せずに、いかによく生きることができるか、というのは永遠のテーマであるかもしれない。労働者への富の普及なしには、労働者のよき暮らしは可能にならない。しかし、富の普及だけではよき人生とは言えない。徳ある生き方をするにはどうすればよいか。よく生きるにはどうすればよいか。ある意味では、スミスたちと同じく、マルクスも、ウェーバーも、ケインズも、自らの時代の文脈のなかで、みな同じ問いを立てたのであった。それをスコットランドの啓蒙の時代の文脈のなかで、具体的に実現する道をスコットランドの知識人は模索した。

1985年には巨匠ポーコックの『徳・商業・歴史』(Pocock, *Virtue, Commerce, and History*) が刊行された⁴⁵⁾。ここには【商業ヒューマニズム】(Commercial Humanism) という概念が登場

するが、それは18世紀のスコットランドなどでシヴィック・ヒューマニズム（CH）が変容を受けて成立した新しい思想を指すもので、ヒュームの経済論文やスミスの『国富論』の根底となった思想のことである。そしてスミスを中心とする研究ではないが、1985年にはリチャード・シャーの『スコットランド啓蒙における教会と大学』（Richard Sher, *Church and University in the Scottish Enlightenment*）およびジョン・ロバートスンの『スコットランド啓蒙と民兵論争』（John Robertson, *The Scottish Enlightenment and the Militia Issue*）が刊行された。

前者はスコットランド教会の自由主義的な牧師、【穏健派】こそスコットランド啓蒙の中核であったとする研究である。後者はフレッチャーに始まる【民兵論争】から啓蒙への展開を跡付ける研究であった。シャーとロバートソンはスミスをスコットランド啓蒙との関連で把握した。フィリップソンは弁護士会にも注目したが、【洗練】（Politeness, Refinement）＝文明化を重視した。日本の研究者はロバートソン著を日本の国防体制の問題を考えながら読んだであろう。戦争放棄が世界の常識ではないなかで、日本は憲法で戦争放棄をうたっている。自衛隊（職業部隊）が国防を担っているが、自衛隊に反対するなら、民兵が選択肢の一つとなる。韓国のように軍隊があり、兵役がある国が普通である。スミスも巻き込んだ民兵論争は、日本の防衛問題を考える手掛かりとなってきたと思われる。

（3）スコットランド研究学会（ECSSS）の発足

1986年に国際18世紀学会と他学会の合同会議がエディンバラで開かれた（IPSE）。これを機に「18世紀スコットランド研究学会（Eighteenth Century Scottish Studies Society）」（ECSSS）が発足した。これはスコットランド啓蒙研究の国際的拠点となり、リチャード・シャー（Richard Sher）が事務局を担当し、今日に至るまで、コンスタントな活動を繰り返しており、ニューズレターは2018年で32号に達している。

1988年にはポーコック教授が初来日した。英米では著名な教授の著作は、難解さも手伝って、日本ではまださほど読まれていなかった。教授は東京大学でも京都大学、甲南大学でも講演またはセミナーを行ったが、経済学史学会でも講演した。その翌年には中国で天安門事件が起りベルリンの壁が崩壊する。

他方、エディンバラ大学でH.B. アクトンと G.E. ディヴィーを指導教授としたホーコンセンは、フォーブズ、T.D. キャンベル、ウィンチ、ポーコックなどの研究を視野に起きながら、ヒュームとスミスの自然法思想を包括的に取り上げた『立法者の科学』をこの年に刊行した（Knud Haakonssen, *The Science of a Legislator: the Natural Jurisprudence of David Hume and Adam Smith*）⁴⁶。ホーコンセンの問題意識は、フォーブズの研究は別として、自然法思想の研究が一代途絶えていたということである。それ以上は語られていないが、スコットランドの自然法思想を顧みることの現代的意味を確信していたに相違ないと思われる。

5 バブル崩壊 経済停滞時代, 1990~2000年

【事件史 1990 マンデラ釈放⇒アパルトヘイト終わる バブル崩壊⇒失われた20年(30年?)

1991 ソ連解体【冷戦終焉】 湾岸戦争 ユーゴ紛争⇒民族紛争⇒空爆

1993 日米包括経済協議(クリントン=宮沢)⇒規制緩和, 98 航空交渉成立

1994 英国鉄民営化(-97)

1995 WTO (GATT 継承) 世界貿易機構

1996 ローマ教皇進化論承認

1997 ブレア政権 東アジア通貨危機

1998 アマルティア・セン, 経済の分配公正と貧困飢餓の研究によりノーベル経済学賞】

(1) アダム・スミス国際シンポジウム(1990年)

何よりも特筆しなければならないのは、1990年のアダム・スミス国際シンポジウムである。これは名古屋と奈良で2日間にわたって行われた。アダム・スミスの没後200年記念として行われた名古屋会議は、「アダム・スミスの思想体系」、「スコットランド啓蒙とアダム・スミス」、そして「スミス思想の各国への普及」という三部に分けられ、活発な報告と討論が展開された。この企画は水田洋教授の尽力が大きかったが、アダム・スミスの会と中京大学が貢献し、また杉山忠平教授など、日本の幾人ものスミス研究者が協力した。スミス研究の国際化、グローバル化がわが国でも始まったという意味で、画期的な催しであった⁴⁷⁾。ここにはデイヴィッド・ラフィルや、イアン・ロス、ディアトキヌなどの長老と中堅、ケアンズ、ドワイア、ワセックなどの若手が参加した。日本の研究者も広い世代にまたがって多くが参加した。その報告書が *Adam Smith: International Perspectives*, eds. by Mizuta and Sugiyama, Macmillan, 1992である。

(2) 日本のスミス研究・スコットランド啓蒙研究の隆盛

第二に、この1990年代は多くのスミス研究が日本で出ている。一つには団塊世代の研究成果が結実し始めたためである。1990年にはユニークな飯塚正朝『『国富論』と18世紀スコットランド経済社会』が刊行されたが、1991年には、内田義彦の影響の濃厚な野沢敏治『社会形成と諸国民の富』と田中秀夫『スコットランド啓蒙思想史研究』が出ている。直接にはスミス研究と言い難い後者は、スミスの視界にあったいわばスコットランドの先行者の思想を「文明社会と国制」に関わるいくつかのトピックに即して掘り起こしたものである。翌年の1992年には、田中敏弘『ヒュームとスコットランド啓蒙』が出版され、これには夙に論文として読みえた知的刺激に満ちたフォーブズ紹介が収録された。1993年には水田洋他訳『アダム・スミス 哲学論文集』(篠原・須藤・只腰・藤江・山崎)が刊行されるとともに、田中正司『アダム・スミスの自然神学—啓蒙の社会科学の形成母体』が出ている。これはスミスの【自然神学】を強調する研究である。

1994年には関源太郎『「経済社会」形成の経済思想』、新村聡『経済学の成立—アダム・スミスと近代自然法学』が刊行された。スミス研究としては関係が弱いかもしれないが、前者はパトリック・リンゼーまでの数名を取り上げ、18世紀前半のスコットランドの経済改革論を、原典を読み解きながら明らかにした独創的な研究であった。後者はホーコンセン並みにスミスの【自然法】を強調した力作であった。また初期スミスに力点を置いた只腰親和『天文学史』とアダム・スミスの道徳哲学』は、スミスの天文学史に注目し、中間的媒介を発見し、結合原理を探す点に、スミスの学問方法論の要を見出し、それがスミス道徳哲学の方法として一貫性をもっていることを説いた。またベテランの研究成果も刊行された。星野彰男『市場社会の体系—ヒュームとスミス』、山崎怜『経済学と人間学』が出版され、1995年にはステュアート研究である竹本洋『経済学の創生』と田添京二『欧州経済学史の群像』が出ている。ステュアート研究が盛んな点にこの時期の日本の経済学史の特徴があった。それはスミス研究への間接的寄与でもある。

1996年には大森郁夫『ステュアートとスミス』が刊行され、1997年には田中正司『アダム・スミスの倫理学』上・下が刊行された。論文であるが、田中秀夫「権威の原理と功利の原理—ヒューム・スミス・ミラー」、『思想』879号は、「権威の原理と功利の原理の両面批判」という有名な内田義彦説への疑問を提起した⁴⁸⁾。

1998年には関劭『スコットランド経済とアダム・スミス』、1999年には田中秀夫『啓蒙と改革—ジョン・ミラー研究』、また佐伯啓思『アダム・スミスの誤算』も出ている。ミラーは言うまでもなくスミスの最愛の弟子である。ミラーの思想の研究はマルクス主義の先駆として解釈される先行研究が極枯となっており、またレーマンの社会学的アプローチは拡散的で核心がつかめておらず、低迷していた。しかし、この時期のスコットランド啓蒙研究などの思想史の新展開によって、スコットランドの文明社会論の多側面に光がてられるようになってきたという事情と『古来の国制と封建法』（1957年）などのポーコックの仕事に示唆を受けて、ようやくミラーの独自性を理解できるようになった。

2000年には水田洋教授のスミス蔵書の積年の調査がまとめられ、カタログが刊行された（Hiroshi Mizuta, *Adam Smith's Library*, Oxford U.P.）。これで3千点ものスミス蔵書の全貌が把握でき、18世紀の博学、碩学のスケールとスミスの蔵書の特徴が、従来以上によく分かることになった⁴⁹⁾。この年から翌年にかけて、水田洋監訳、杉山忠平訳『国富論』岩波文庫が完結した。優れた論考を収録した水田洋の『思想の国際転移』（名古屋大学出版会）がこの年に出版され、田中正司『アダム・スミスと現代』も出た（増補版は2009年）。山崎怜『経済学体系と国家認識』、そして若い世代の伊藤哲の『アダム・スミスの自由経済倫理観』がこの年に出ている。

(3) ロス教授の伝記的業遺とホーコンセンの自然法研究

ロス教授のスミス伝、『アダム・スミス』の初版は1995年、第2版は2010年に刊行された（Ian Simpson Ross, *Adam Smith*, 1995, 2nd ed. 2010）⁵⁰⁾。このイアン・ロス『スミス伝』は『ケイム

ズ卿と彼の時代のスコットランド』(*Lord Kames and the Scotland of His Day*, 1972) とともに詳細で信頼できるスタンダードとして広く参照された。スコットランド出身者としてカナダのブリティッシュ・コロンビア大学で教鞭をとったロス教授は、デイヴィッド・ヒュームの画期的な伝記(*The Life of David Hume*, 1954, 2nd ed.1980) で知られるモスナー教授(E. C. Mossner)の後継者である。ロス教授は5年ごとに来日し、関西学院大学で講義をした。その先駆はアンドルー・スキナー教授である。その他、ウィンチ、フィリップスンやディキンソン、ベリー教授などの日本(人)への貢献は在外研究の受入も含めて大きい。ウィンチ教授は1992年5月に京都大学経済学研究科で、大学院生向けの講義を数日間、行ったが⁵¹⁾、ディキンソン教授も2005年の3月に京都大学経済学研究科で、1週間にわたる大学院生以上を対象とするセミナーを行った。これはスミス研究には直接の関係がない(間接的には関係がある)ので、ここで触れる必要はないかもしれない。

さらにまた1990年代におけるホーコンセンの影響は、わが国だけではなく、かなり大きく広がったと思われるが、スミスと自然法の関係への着目に関心が集まった。Liberty Fundの近代自然法シリーズも重要である(テムス書店のリプリントなどもある)。そしてホーコンセンの自然法研究が1996年に刊行された(Haakonssen, *Natural Law and Moral Philosophy: From Grotius to the Scottish Enlightenment*, 1996)。ホーコンセンは1994年と2000年来日し、多くの日本のスミス研究者などに刺激を与えた。

道徳哲学史としてはスミスの倫理学も論じたシュナイウィンドの大著(J. B. Schneewind, *The Invention of Autonomy, A History of Modern Moral Philosophy*, 1998)がある⁵²⁾。

以上のような1990年代のスミス研究の隆盛には、ソ連の解体と西側の民営化の流れが大きな影響を与えたのではないかと推察される。

6 テロとグローバル化の21世紀, 2000年以降⁵³⁾

【事件史 2001 地球人口61億 IRA 武装解除 9.11同時多発テロ アフガニスタン空爆 アルカイダ【テロとの戦い】 中央省庁統合 小泉政権・郵貯民営化

2002 ユーロ流通開始

2003 米英軍イラク攻撃

2008 リーマン・ショック(金融危機)

2010 中国のGDPが日本を超える

2011 3.11東北関東大震災

2012 第二次安倍内閣⇒アベノミックス 習近平政権

2013 トマ・ピケティ『21世紀の資本』(英訳2014, 日本語訳2015)

2016 英国のBrexit(EU離脱)決定

2017 習近平政権第二期】

21世紀になって、フランシス・フクヤマの言うように歴史は終わらず、世界はテロと天変地異、原発暴走などに見舞われている。温暖化と気候不順はますます危険になりつつある。厳しい環境基準を定めて、国際協定を順守するように世界が進む必要がある。これは人口問題とともに喫緊の課題であろう。核兵器の廃絶も進んでいない。核の問題は、現実に核抑止が機能しているのではないかという問題と絡んでいるので、明確な回答が出せないのだろうか。しかし、国際原子力機関（IAEA）が核拡散を阻止するために、困難な活動を強いられていることも確かである。核保有国から核が拡散しない保証はどこにもない。

したがって、ジェノサイドをもはや繰り返してはならないとすれば、核の廃絶、戦争の廃止を21世紀の世界は実現しなければならない。そして73億人になった地球人口の抑制も進めなければならないだろう。しかし、人口問題は人為的に制御するのが難しい問題である。事は人権にかかわるからである。このような難問にスミス研究はどう対応できるのだろうか。それに対してはスミスの「シンパシー」の思想、人類は同胞として共存できるという思想が寄与できるだろう。

（1）研究の多様化

それでは21世紀のスミス関連の研究はどうなっているのだろうか。2002年に田中秀夫『原典探訪 アダム・スミスの足跡』（法律文化社）が出た。これは大学生を念頭に書かれたものである。ここでは自然法と共和主義の伝統からいかにして新しい社会認識の学としての経済学が形成されるかという（『富と徳』と共通の問題設定の）、経済学の形成問題を中心に、最近の研究の成果を踏まえて、スミスの重要な思想を回顧している。

翌年の2003年に、アルヴィー『アダム・スミスは楽観主義者か悲観主義者か』（James E. Alvey, *Adam Smith : optimist or pessimist? : a new problem concerning the teleological basis of commercial society*）と題するスミスの商業社会論の神学的基盤を問題にする研究が出た。これまでも同種の主題の研究がなかったわけではないが、アルヴィーの研究は本格的である。アルヴィーは田中正司教授のスミスの自然神学に関する研究を評価しており、二人の交流が深められた⁵⁴⁾。またこの年には、田中正司『経済学の生誕と『法学講義』—アダム・スミスの行政原理論研究』（御茶の水書房）、田島慶吾『アダム・スミスの制度主義経済学』（勁草書房）、稲村勲『『国富論』体系再考』（ミネルヴァ書房）といったベテランの研究が出ている。そして2004年には水田洋・松原慶子共訳『アダム・スミス 修辞学・文学講義』⁵⁵⁾が刊行された。先行訳⁵⁶⁾とともに利用できるようになったことは喜ばしい。

（2）ケンブリッジ・モーメント、千葉国際シンポジウム（2005年）

スミス研究の回顧のなかで扱う適切性はあまりないが、ポーコックとホントとの関連があるので、ここで触れておこう。2005年に千葉大学で開催された国際シンポジウムは多くの参加者

が集まった。二度目の来日となったポーコックとともに、ホントが初来日したし、ジョン・ダンその他のケンブリッジの研究者たちが加わり、日本側からも数名以上が報告者に連なった。報告は、報告集のほか、一部が千葉大学の紀要⁵⁷⁾に掲載されている。ポーコックもホントも方々の研究会などに招かれ、日本人研究者と交流した。

この年、2005年に待望のホントの研究が『貿易の嫉妬』(Istvan Hont, *The Jealousy of Trade*, Harvard U.P.) というタイトルで出版された⁵⁸⁾。ここでは近代の【国家理性】に改めて光が投げられ、プーフェンドルフ、ヒューム、スミス、スコットランド啓蒙が、国民国家との関係で取り上げられ、その後の人権・正義・富裕と経済思想が、分断された国民国家の角逐のなかで、いかに危機に直面してきたかという、文明化、グローバル化の暗部に注意が注がれた。それは、現代にいたるまで、戦争と内乱が繰り返されている地球社会を考えると、当然であるかもしれない。また個人的には、エミグレとしてハンガリーのブタベストからオックスフォード、ケンブリッジへと困難な研究の遍歴を余儀なくされたホントにしてみれば、当然の帰結でもあったかもしれない⁵⁹⁾。

2005年には、日本では山崎怜『アダム・スミス』、竹本洋『『国富論』を読む』も出ている。いずれも力作である。そして2006年には、ハーコンセン編の『ケンブリッジ、アダム・スミス・コンパニオン』(Haakonssen ed., *The Cambridge Companion to Adam Smith*)、および急進的平等思想家としてスミスを把握するマクリーンの『アダム・スミス』(Ian McLean, *Adam Smith: Radical and Egalitarian*) が刊行されている。マクリーンの言うように、あるいはイグナチエフも近いが、スミスに急進的平等主義者という一面があることは確かかもしれないし、それが弟子のミラーに受け継がれたとも考えられるが、しかしアーガイル派でもあったスミスには保守的な側面もあるので、そうした諸側面を矛盾せずにいかに統一できるであろうか。それは未だ課題である。

(3) 合邦300年国際会議、エディンバラ (2007年)

2007年はイングランドとスコットランドの合邦300年の節目であって、エディンバラで国際会議が開かれた。主催は18世紀スコットランド研究学会 (ECSSS) で、招待講演はリンダ・コリーが行った。コリーはやがて出版されることになる *Captives*⁶⁰⁾ について語った。会長のフィリップスンが輝いていたが、彼もまたすでにいない。この年に偉大なデイヴィッド・ラフィルが興味深い『公平な観察者』という小著を出した (D.D. Raphael, *The Impartial Spectator*)⁶¹⁾。またアリギの『北京のアダム・スミス』⁶²⁾ (Giovanni Arrighi, *Adam Smith in Beijing*, Verso) が出たのもこの年である。アリギ著について少し触れておこう。

(4) アリギ『北京のアダム・スミス』(2007年)

1970年代には、中国が世界の工場となり、世界の第二の経済大国となって、世界経済を牽引する時代が来るとは、おそらく誰も予測できなかった。文化大革命が10年に渡り繰り返され

た。それは古来の旧習・伝統批判でもあったが、都市の特権階級がつるし上げられ、農村へ「下放」された、毛沢東の煽った階級闘争であった。膨大な犠牲が生み出された。やがて鄧小平や周恩来の改革開放の路線に転じた中国は、国交を正常化して、アメリカ合衆国と日本をはじめとして諸外国に門戸を開き、外資導入によって急速に工業化を推進し、2010年にはGDPが日本を超え、世界第二の経済大国になった。そこにはまさに中国型の原資蓄積が見られた。長い貧困のなかで苦しんできた農民と労働者が、この経済成長に進んで飛び込み、それを推進したのである。こうした経済発展を何が可能にしたのか、中国経済は共産党が指導する社会主義的市場経済なのか、やがて一党独裁の体制と市場経済は対立を招くのではないかと、などといった中国の経済発展の関連諸問題をめぐって、特にアメリカで大論争が起った。グンナー・フランク、ポメラント、ブレンナー、杉原薫などが健筆を揮った。本書はその論争に詳しく立ち入った文献であるが、第1章「デトロイトのマルクスと北京のアダム・スミス」と第2章「アダム・スミスの歴史社会学」は経済学史への貢献といえるだろう。

アダム・スミスは、老大国中国は発展の結果、古代に停滞に陥ったと見ていた。地理上の発見によって、ヨーロッパ人は東西両インドの住民を抑圧し掠奪した。力の差異が巨大なために処罰されずにあらゆる不正を行わせたから、貿易の恩恵は失われた。こうした国の住民が「力と勇気」で対等になれば、相互の恐怖心をかきたて、相互の権利を尊重せざるを得なくするであろう、とスミスは述べた⁶³。しかし、スミスはアジアや中国がブリテンやヨーロッパと対等の力を得る時が来ると確信していたわけではない。ただし、スミスの自由貿易論は、各地域が相互の不足を補うことによって、恩恵を広める効果を展望するものとして、自由貿易が普及すれば、自由貿易帝国主義になるのではなく、アジアや中国も経済発展するであろうという予測を可能にする理論であった。

(5) 2008年の金融危機

サブプライム・ローンからリーマン・ブラザーズの破綻を経て、英米、ヨーロッパ、日本を巻き込んだ金融危機、経済危機は、1930年の世界大恐慌のような破綻、社会の崩壊には至らなかった。それはインフラストラクチュアが強力であり、また各国政府の経済政策、景気刺激策としての財政出動がそれなりに有効であったことを証明した⁶⁴が、不良債権の処理という問題を残した。ケインズ政策が奏功したが、ついても残ったということだろう。したがって、ケインズ政策は有効でなかったという評価も当然ありうる。この経済危機にスミス研究者はどういう分析を行い、処方箋を書けたのだろうか。

もとより、スミスには景気循環論などはない。景気循環が発生するのは19世紀になってからである。ただし、経済の好不況は18世紀にもあり、南海バブルなどは有名である。スミスはこうした景気変動を何ら知らなかったわけではない。商業金融や公債もスミスは重視していた。しかし、基本的にスミスは経済的自由、自由競争によって、市場において財や資金、労働力の価格変動が生じ、需給の一致（均衡価格＝自然価格）に向かうと考えた。個別的には不均衡で

あるが、外生変数が介入しない限り、商取引は常に均衡に向かって動く傾向がある。すなわち、それぞれの経済主体の自己利益を追求する努力によって、社会のアンバランスは需給関係を通じて調整され、短期的な個人の失業も調整されて解消し、全員が次第に豊かになっていくと考えた。

こういう自由主義、個人主義への強固な信頼を持ち得れば、スミス研究者は、経済危機を各人の努力、相互協力で乗り越えられると楽観できるであろう。重要なのは経済主体の努力である。魔法のような政策はない。

ケインズ政策は有効需要創出策である限り、スミスが暗黙の裡に批判したジェームズ・ステュアートのステイツマンの介入に似ているけれども、スミスはその種の発想を禁じた。その点でスミスの自由主義、個人主義は保守的でもある。しかし、同時代の文脈でスミスを保守的というのは注意を要する。圧倒的に重商主義者たちから成っている上流社会、為政者や知識人の社会のなかで、彼ら体制派の重商主義、植民地主義、権力政治、財政軍事国家を真っ向から批判したのがスミスなのであるから、スミスは大いに体制批判者なのであった。

2008年には、大島幸治『アダム・スミスの道徳哲学と言語論』と題する力作と、小著ながら評判のよい堂目卓生『アダム・スミス—『道徳感情論』と『国富論』』が出ている。そしてその翌年の2009年には、重要な論文を収録した水田洋『アダム・スミス論集』、田中正司『現代世界の危機とアダム・スミス』、鈴木亮の遺稿集としての『『国富論』とイギリス急進主義』が刊行された。2010年には星野彰男『アダム・スミスの経済理論』が出た。

(6) フィリップソンのスミス伝、その他

2010年には待望のフィリップソンのスミス伝 (Nicholas Phillipson, *Adam Smith: An Enlightened Life*) が刊行された⁶⁵⁾。これにはオックスフォード時代のスミスの行動について新しい情報が盛り込まれているし、最新の伝記として参照すべきものである。わが国では、この年に、中川栄治『「アダム・スミス価値尺度論」欧米文献の分析』上(下は2016年)なる大著が出た。

翌年、3.11東北関東大震災によって福島原発事故が起る。この年の学史学会大会は予定されていた福島大学から急遽、京都大学に変更となった。大会の総会は震災への学会の対応の是非をめぐって紛糾したが、会員は久しぶりに熱くなった。同感が拡がっていき、その後の懇親会は盛り上がったが、学会は少なからぬ会員を失った。2012年に経済学史学会は60周年記念として『古典から読み解く経済思想史』を刊行したが、震災を反映した内容とし、学会外部の読者向けにするという方針をとり、特にスミスの総合知に学ぶ姿勢を重視した⁶⁶⁾。2011年には佐々木武・田中秀夫編『啓蒙と社会—文明観の変容』と野原慎司『アダム・スミスの近代性の根源』も出版された⁶⁷⁾。前者は水田洋教授の卒寿を記念した記念論集であり、スミス論3編を含む15論文からなる。後者は新鋭の粗削りだが斬新な研究である。

2012年には田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像—スコットランド啓蒙の影の下で1723~1801』⁶⁸⁾とハーマン『近代を創ったスコットランド人』の邦訳⁶⁹⁾も出版された。

2013年には田中正司『アダム・スミスの認識論管見』と村松茂美『ブリテン問題とヨーロッパ連邦—フレッチャーと初期啓蒙』⁷⁰⁾が出版された。フィリップスンの門をたたいた村松は、EUの思想的源泉の一つとも言えるアンドルー・フレッチャーのスコットランドの民兵論、独立論、ヨーロッパ連邦論などに注目した。本書は愛国者フレッチャーを包括的に理解しようとした労作であり、2016年度の第1回経済学史学会賞を授与された。同じ年に海外ではベリー他編『オックスフォード、アダム・スミス必携』(Berry, Paganelli, and Smith eds., *The Oxford Handbook of Adam Smith*) およびベリー『スコットランド啓蒙における商業社会の理念』(Christopher Berry, *The Idea of Commercial Society in the Scottish Enlightenment*) が出版されている⁷¹⁾。後者はベリー教授の積年の研究の結実であるが、今年になって論文集も出ている⁷²⁾。2014年にはスミスが家庭教師となった第三代バクラー公爵の地道な研究も出た (Brian Bonnyman, *The Third Duke of Buccleuch and Adam Smith*, Edinburgh U.P.)。

経済学史学会は2016年にヨーロッパ経済学史学会との共同会議（英語使用）を小樽で開催した (Otaru Conference) が、そこではアダム・スミス関係の論文もいくつか読まれた。新進の荒井智行『スコットランド経済学の再生』と中野力『人口論とユートピア』も刊行された。前者はD・ステュアートの経済学の研究であり、後者はヒュームの論敵でもあった穏健派の先駆ロバート・ウォレスの研究である。スミス周辺の研究ということになるが、いずれも単著での研究は世界的に見ても異例である。内容は掘り下げの余地があるが、両著共に力作である。

2017年に待望のフィリップスン (Nicholas Phillipson) が来日し徳島文理大学での経済学史学会の招待講演が実現した。同年に出版された高哲男『アダム・スミス』は入門書であるが、初期スミスの音楽論や生物学への関心を紹介している点に新しさがある。そしてこの年には田中正司『増補改訂版 アダム・スミスの倫理学—『哲学論文集』・『道徳感情論』・『国富論』』(御茶の水書房) が刊行された。本書はこれまでの田中教授の研究の集大成と見做してよいだろうし、序章には今日までのスミス研究史の鳥瞰があり、本稿が触れることのできなかった多数の有力文献⁷³⁾ が取り上げられている。

(7) グローバル化と格差問題等へのスミスの処方箋はいかに書けるか。

最近、世界的に注目を集めているのは格差社会という問題である。スミスは、自由競争は富裕な社会を実現すると考えた。自由競争は平等な社会を生み出さなくても、富は普及し、多かれ少なかれ、勤労者に豊かな生活をもたらすとした。特に近年のグローバルな自由主義の進展は、情報化を通じての、またタックスヘイヴンなどを利用しての、強欲な投資家、資産階級による飽くことのない金融資産の肥大化を許し、世界的な富国と貧国の格差拡大をもたらしたが、一国でも同じように格差の拡大をもたらしたというのが、トマ・ピケティの『21世紀の資本』(2013年、邦訳、みすず書房、2014年)の問題提起であった。これに対してスミス研究者はいかに応答できるだろうか。法の支配による人身の自由や財産の保全、人権の保障を前提としたからといって、自由主義、自由競争だけで格差社会が解決できるはずがない。スミスから

直接に現代の世界資本主義の欠陥にたいする処方箋が導き出せるであろうか。

ハイエクはともかくアマルティア・センは、スミスとミルの自由主義経済思想に自らの立脚する原理を求め、厚生経済学によって格差に取り組んでいるから、スミス研究者が処方箋を書けないとすれば怠慢のそしりを免れないであろう。

スミス研究は、一方では時代を超えた理論的・思想的主題の追究に多くの成果が見られるが、他方ではスミスの時代の文脈のなかで、より正確なスミスの思想（と行動）の解明を進めるといふ歴史研究も進んでいる。こうした二つの研究が大きな流れであるが、それは多かれ少なかれ、研究者の問題意識、価値理念に発するものであり、歴史的社会の構造が引き起こす事件と直接に関連するものではないことが多いが、しかし大きな時代の流れ、世界の構造転換と、決して無関係ではないであろう。

人間愛としての同感、そして同感を得るための自己規制、市場と社会における公正な利益追求、勤労と生存行為への邁進、よく生きるための活動、リスクに備える慎慮、その他、スミスが提出した思想はよき社会を考えるうえで、今も参考になる。アダム・スミスの教えのおかげもあって、現代人は、かつてない物質的に豊かな社会に暮らしている。格差がないわけではない。また様々な危機が繰り返し襲ってくる。環境の劣化、悪化は恐ろしいほどに進んでいる。地球の人口はまだ増加する。将来、もっと深刻な事態が発生する可能性がある。したがって、現代のスミス研究者は、アダム・スミスの真の思想を明らかにしたうえで、それをいかに修正すれば、今日の文明社会の危機を乗り越えられる思想にできるか、その方法を考えねばならないであろう。

注

- 1) 本稿は本年(2018年)6月2日に東京大学で開催された第82回経済学史学会大会において、セッションの報告として行ったものをもとに大幅に加筆修正したものである。セッションの主題は「アダム・スミス研究を回顧する」というもので、渡辺恵一氏(京都学園大学)、筆者、篠原久氏(関西学院大学)が行った。司会は奥田敬氏(甲南大学)、討論者は、新井智行氏(下関市立大学)、青木裕子氏(武蔵野大学)、村松茂美氏(熊本学園大学)である。筆者の報告は時間の制約のために、ごく大雑把なものに終わった。セッションには多数の会員が出席したから、主題は関心をもたれたと思われる。なお、以下での書誌情報は、出版地と出版社名をしばしば省略している。すべてを記載すると煩雑になりすぎるので、いささか恣意的になるけれども、適宜省略したことをお断りする。また敬称は省略したが、しばしば教授と書いている場合もある。
- 2) 杉原四郎「日本のアダム・スミス研究史に関する一考察」、『産業と経営』(奈良産業大学)第5巻第2号、1990年9月、17-32頁、その他、多くの研究がある。
- 3) シーラ・ホッジズ『ゴランツ書店—ある出版社の物語1928-1978』(奥山康治・三澤桂子訳)、晶文社、1985年、ジョン・ルイス『出版と読書—レフト・ブック・クラブの歴史』(鈴木建三訳)、晶文社、1991年を参照。
- 4) ハーヴェイ・J・ケイ『イギリスのマルクス主義歴史家たち』(桜井清監訳)、白桃書房、1989年が参考になる。
- 5) 杉山光信『戦後啓蒙と社会科学の思想』新曜社、昭和58(1983)年。本書の丸山論や内田論は、出版後35年経った今読み返しても優れている。四半世紀過ぎて、杉山は2009年の日仏国際シンポジウム—「日本の「近代化」再論」—報告に加筆した「「近代化」と「二つの道」—内田義彦の「市民社会」再考」を2012年に発表した(『明治大学心理社会学研究』第8号)が、これは『生誕』以前の内田の当該主題に関する考えを明確化し、内田は山田盛太郎＝農林省の農地改革を批判し、社会主義農業を展望していたと指摘している。

- 6) 内田義彦については、著作集もあり、包括的な内容の『内田義彦の世界』(藤原書店, 2014年)が出ている他に、いくつかの研究がある。力作は野沢敏治『内田義彦 日本のスミスを求めて』社会評論社, 2016年(副題はミスリーディング)。鈴木信雄『内田義彦論ひとつの戦後思想史』(日本経済評論社, 2010年)。
- 7) 内田は平田との対談でこう語っている。長文になるが、率直な発言が見られるので、引用しておく。「日本ファシズムの研究を本格的にやろうということで丸山真男君とか、辻清明君とかの政治学者と宇佐美誠次郎君、井上晴丸君とほくといったような経済学者がいっしょにやり始めた。この一連の『潮流』論文の中で丸山君、井上、宇佐美君らのものは後にそれぞれ本になりました。」「この『潮流』論文が生産力論だといわれた。確かにそのとおりです。だが批判者の批判で問題がつくされているかという、どうもそうは思われない。自分で納得のいく自己批判をやってみようと思った。そこで、ちょっと日本を離れて、しばらく海底にくぐってじっくり考えてみましょうということからスミスとスミス研究に沈潜したわけです。日本の問題を直接対象にすると考えにくいんですね。・・・自分で納得のいく見方をこしらえるために迂回生産が必要だと思った・・・戦時中から始まったスミス研究の眼で日本を見ても困るし、従来のマルクス研究者の眼で、スミス研究者が日本を見る見方を否定するだけでも問題は解けない。スミスを思いきってふくらませてみる。ふくらませながら、マルクスの問題とその解決の仕方をあらためて考える。そういう仕方とマルクスの経済学をとらえてみたいと思ったわけです。』『内田義彦対談集—読むということ』筑摩書房, 1971年, 216-7頁。これは著作集, 第7巻にも、『内田義彦の世界』の「内田義彦の生誕」(山田鋭夫編)にも収録されている(238-9頁)。
- 8) 戦後啓蒙の思想家・知識人のなかで、丸山真男は群を抜いて多くの研究対象となっており、多数の研究書や論文が書かれている。外国人の丸山論も何点もある。丸山は研究対象として福澤論吉に匹敵するとまでいうと、言い過ぎかもしれない。大塚久雄論や内田義彦論はその次に多いとはいえ、その数はさほどではない。小林昇論はずっと少ない。評論家まで広げると、加藤周一論と竹内好論がやや多いように思われる。吉本隆明は相当多く論じられているが、その思想は独創的であっても独断的で、経験主義的ではないので、評価が難しい。鶴見俊輔と清水幾太郎も重要な研究対象になっているが、丸山に比すべくもない。司馬遼太郎論は多いが、これは同類ではない。このように丸山は抜群に評価されている(今では日本政治思想史研究などへの批判も多い)のだが、マルクスの著作に親しみ、自家業籠中のものにしているにもかかわらず、丸山はあくまでも政治に関心を限定しており、経済学や経済思想、経済問題にしかるべき配慮や関心を示したようには思われない。福澤論吉のように経済を政治以上に重視した思想家を対象としてもそうである。経済学と経済問題の軽視あるいは除外は丸山の弱点であったかもしれない。丸山は政治に関心があった、経済には関心がなかったのであろう。
- 9) 小林昇『経済学史春秋』未来社, 2001年, 195頁。
- 10) この論争の限定的ながら的確な理解は、渡辺恵一「内田・小林論争とアダム・スミス研究」、『経済学論究』第67巻第2号, 2013年9月(53-73頁)にある。「スミス経済学の地盤」および急進主義と保守主義との関連をどうみるか、という点に論争の焦点を集約した渡辺は、二人は必ずしもすれ違ったというのではなく、論争はそれなりにかみ合っており、むしろスミス理解で共通点が多い——小林の主張するように「タッカーとスミスが、ともに経済的自由主義と政治的保守主義の両面を合わせもつ同時代の思想家であったことは、内田も認める」(68頁)であろう——ことを指摘している。渡辺の分析は本格的であり、簡単に要約できるほど易しいものではない。論争と渡辺の理解については、改めて論じたいと思う。
- 11) 小林は段階としての「固有の重商主義」という概念を一貫して堅持したが、それが政策だとすれば、段階ではないだろうという疑問を生みだした。服部・竹本編『回想 小林昇』日本経済評論社, 2011年, 所収の米田昇平論文、岩元吉弘論文を参照。
- 12) 前掲の渡辺は、内田も小林も産業革命について1760年代に北部イングランドの工業地帯において起ったという旧い常識に従っているが、今では産業革命は1780年代から起ったというのが経済史の有力な説であると指摘している。こういうことは歴史研究ではままたま起ることである。同時代の研究水準に制約されるからである。
- 13) 小林昇『経済学史春秋』162,193頁。
- 14) 小林昇『経済学史春秋』203-4頁。
- 15) 田中秀夫「白杉庄一郎のアダム・スミス研究」、『経済論叢』第172巻第3号, 2003年9月を参照。
- 16) 敦賀市に生まれた大道は敦賀商業学校時代に賀川豊彦と出会い1923年に関西学院高等商業学部に入学生、文学部教授新明正道と出会い社会学への道に進んだ。27年卒業し、九州帝国大学の高田保馬のもとへ進学。30年に卒業、高等商業学部講師、助教授、教授を経て、44年に旧制の法文学部教授。その後、新制の文学部教授となり、60年の社会学部設立に中心的役割、初代社会学部長に就任。大阪商科大学教授堀経夫の指導を受けた『スミス経済学の生成と発展』(1940)、『スミス経済学の系譜』(1947)、『国富論の草稿—その他』

- (1948). 関西学院の国民生活科学研究所 (1944-45) 時代の『アメリカ社会学の潮流』(1948), 『アメリカ社会学の源流』(1958), さらに『日本社会学の形成』(1968), 『高田社会学』(1952), 『新明社会学』(1974) など多くの業績をもつ。関西学院事典より。
- 17) 大河内一男『矢内原先生と『アダム・スミスの会』], 南原繁他『矢内原忠雄—信仰・学問・生涯』岩波書店, 昭和43 (1968) 年, 432-35頁。
 - 18) 西田慎・梅崎透編著『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」』ミネルヴァ書房, 2015年。
 - 19) 大野はヒュームの研究者で、『歴史家ヒュームとその社会哲学』岩波書店, 1977年がある。これは当時の研究を広く参照しており, 学術的に評価できる研究である。
 - 20) James McCosh, *The Scottish Philosophy*, Macmillan, 1875を参照。
 - 21) E.G.West, *Education and the State*, Liberty Fund, 1965. *Economics, Education and the Politician*, London: Institute of Economic Affairs, 1968. *Adam Smith*, New Rochelle, NY: Barnes & Noble, 1975. *Education and the Industrial Revolution*. Liberty Fund, 1975.
 - 22) 水田洋・杉山忠平編『アダム・スミスを語る』ミネルヴァ書房, 1993年, 62頁。
 - 23) 『法学講義』A ノート (LJA) の邦訳は, 水田洋・篠原久・只腰親和・前田俊文訳『法学講義1762~1763』名古屋大学出版会, 2012年。高島・水田による『法学講義』(LJB) の邦訳は1947年に出版されていたが, 2005年に水田洋の新訳 (改訳) として岩波文庫に収録された。本邦初訳は榎原信一『政治経済国防講義案』山口書店, 1943年である。
 - 24) 田中・奥田・森岡訳, 名古屋大学出版会, 2003年。
 - 25) 小林昇監訳『アダム・スミスの経済学』東洋経済新報社, 1976年。
 - 26) 添谷・金田訳『ザ・ニーズ・オブ・ストレンジヤーズ』風行社, 1999年。
 - 27) 田中秀夫監訳『ヒュームの哲学的政治学』昭和堂, 2011年。
 - 28) 田中敏弘『イギリス経済思想史研究』御茶の水書房, 1984年。
 - 29) 「ケンブリッジ・パラダイムとスコットランド人哲学者—18世紀社会思想のシヴィック・ヒューマニズムの解釈と市民法学的解釈の関係の研究」
 - 30) ハイエクの「医学博士バーナード・マンデヴィル」は1966年, 「デイヴィッド・ヒュームの法哲学と政治哲学」は1963年に講演で読まれた。ハイエク『市場・知識・自由』(田中真晴・田中秀夫訳) ミネルヴァ書房, 1986年を参照。
 - 31) 翌年, 杉原四郎「日本のスミス研究—『国富論』刊行200年特集 スミス研究の動向」が発表された (『経済資料研究』1977年, 第12号, 3-12頁)。これは戦前の研究の回顧と戦後のトリオの研究を取り上げている。
 - 32) この有名な鼎談は, 水田洋・杉山忠平編『アダム・スミスを語る』ミネルヴァ書房, 1993年に採録された。
 - 33) 邦訳は, 田中秀夫監訳, 村井路子・野原慎司訳, 昭和堂, 2015年。
 - 34) ミークは1973年のチュルゴの英訳で, チュルゴにおける4段階理論を探っている。R. L. Meek, *Turgot on Progress, Sociology and Economics*, Cambridge U.P., 1973. 筆者は大学院時代に木崎喜代治教授から, この文献をはじめ, フランス啓蒙について多くを学んだ。
 - 35) 永井・近藤訳『アダム・スミスの政治学』ミネルヴァ書房, 1989年。
 - 36) こうして共和主義思想への関心が浸透していくが, これにはポーコックの解釈に修正を求めるクエンティン・スキナーの研究が登場し (例えば *Liberty before Liberalism*, Cambridge U. P., 1998, 『自由主義に先立つ自由』梅津順一訳, 2001年), 共和主義論争になっていく。またアメリカでは公共哲学としての共和主義の興隆もあったので, 共和主義研究も複雑となった。ケンブリッジ大学教授スキナーの影響力は大きく, 2冊本の共和主義研究など膨大な研究文献が出ている。 *Republicanism: A Shared European Heritage vol. 1. Republicanism and Constitutionalism in Early Modern Europe, vol. 2. The Values of Republicanism in Early Modern Europe*, co-ed. Quentin Skinner with Martin van Gelderen (Cambridge U. P., 2002)。
 - 37) 田中敏弘他訳『社会科学の体系』未来社, 1981年。
 - 38) 1980年以降の日本のスコットランド啓蒙研究の動向については, 『経済学研究』愛知学院大学経済学会, 第2巻第2号, 2015年3月に, 渡辺恵一氏によるリストがある。筆者は2006年以降の海外のリストを作成した。35-61頁。これは本稿と部分的に相互補完的である。
 - 39) 福鎌忠恕訳, 御茶の水書房。
 - 40) 田中真晴・田中秀夫共編訳, ミネルヴァ書房。
 - 41) 水田洋・杉山忠平監訳, 未来社, 1990年。ベルリンの壁の崩壊, 東西冷戦の終焉, 歴史の終わりが語られた時代に, 『富と徳』は邦訳された。本書の日本の学界への受容は, 勝利した市場経済の富と徳の問題を想起しながら, また天安門事件で潰えた中国の民主化の暗黒を反芻しながら, 進んだのかもしれない。
 - 42) 『富と徳』邦訳, 3頁。

- 43) スミスの『国富論』は自然法の産物であると若いシュンペーター(1911年の講演)は考えていた——「この自然法の胎内に経済過程の基本問題を探究しようという動きが芽ばえ、それがたとえばプーフendorfではまことに愛らしい小さな学説となり、次いでそれがハチソンに受け継がれ、さらにハチソンからアダム・スミスへと受け継がれた」、『社会科学の未来像』谷嶋喬四郎訳、講談社学術文庫、1980年、78頁——が、『経済分析の歴史』(1954年)では、自然法と重商主義経済時論の二つの系譜の総合として成立すると把握した。小林昇は重商主義経済時論(の批判)から『国富論』は誕生したとし、自然法からの系譜は問題にできなかった。ここでホントたちは若いシュンペーターの立場に近い。
- 44) モラル・エコノミーとポリティカル・エコノミーの対立についてはいくつかの邦語文献がある。音無通宏「モラル・エコノミーとポリティカル・エコノミー」、『経済学史学会年報』第36号、1998年、26-39頁、中澤信彦「モラル・エコノミーとアダム・スミス研究」、『関西大学経済論集』第48巻第4号、1999年、435-51頁、田中秀夫「18世紀ブリテンにおける社会秩序観の転換—モラル・エコノミーとポリティカル・エコノミー」大阪商業大学『地域と社会』第5号、2002年。
- 45) 田中秀夫訳、みすず書房、1993年。
- 46) 永井・市岡・鈴木訳『立法者の科学』ミネルヴァ書房、2001年。
- 47) 「スミス思想の各国への普及」というトピックは、「経済学の制度化」と関連して、その後の学史・思想史研究の有力な動向となったが、スミスに関しては水田教授が主導した。
- 48) この疑問はスミスの『法学講義』の読み方への疑問であって、スミスはウィッグの功利の原理とトリーアの権威の原理の両面批判を行ったという内田説は短絡的であり、スミスは両原理を存在理由があるものと認めているが、しかし前者の立脚する社会契約説と後者の受動的服従論を虚構・極論・暴論として退けたという理解を提示した。これに対して日本の学会では反応がなかった。
- 49) ちなみにチュルゴの蔵書目録、フレッチャー、ヒュームの蔵書目録も編集されている。
- 50) 篠原・松原・只腰訳、シュプリンガー、2000年。
- 51) 「やや長く滞在して大学院生の研究指導に協力してほしいという本学スタッフの希望にこたえられた・・・教授はこのために、2ヵ月の滞在期間のあいだに、アダム・スミスからケインズにいたるイギリスの経済学者を順次とりあげる連続セミナーを都合6回開かれた。英語でおこなわれたこのセミナーには、本学の大学院生だけでなく、他大学の大学院生、さらに学内・学外のすでに業績のある研究者も顔をみせ、毎回10-20人の出席する有益かつ賑やかなセミナーになった。」八木紀一郎・山田晃嗣「記事 ドナルド・ウィンチ教授特別講演会」、『経済論叢』第150巻2・3号、1992年6月、115頁。
- 52) 田中秀夫監訳、逸見修二訳『自律の創成』法政大学出版局、2011年。こうした大著はどうしても高価になり、普及しない傾向がある。
- 53) 2000年から2010年までの内外の国富論研究については、渡辺恵一のサーヴェイがある。「アダム・スミス研究の動向—過去10年における内外の『国富論』研究を中心に」、『経済学史研究』第53巻第1号、2011年。また2010年以前の人文学者としてのスミスについての海外の研究のサーヴェイとして、大島幸治、佐藤有史「海外アダム・スミス研究の動向—人文諸科学におけるその興隆と「アダム・スミス問題」の復活を中心に」、『経済学史研究』第52巻第1号、2010年がある。
- 54) 「田中正司の渾身の研究への評価も…国際的規模で求められるべきであろう」(『経済学史春秋』203頁)と書いた小林の願望は一部叶ったかもしれない。
- 55) 名古屋大学出版会。
- 56) 宇山亮一『アダム・スミス 文学・修辞学講義』未来社、1972年。
- 57) *International Journal of Public Affairs*, vols. 2, 3, 2006, 2007.
- 58) 田中秀夫監訳、昭和堂、2009年。
- 59) すでに病魔に襲われていたホントは10年後に他界する。残された膨大な原稿など関連資料はセント・アンドルーズ大学に保管され、一部利用できるようになっている模様である。そこにはウィンチの関係資料も所蔵されている。
- 60) Linda Colley, *Captives: Britain, Empire, and the World 1660-1850*, London, Pimlico, 2003. リンダ・コリー『虜囚 1600~1850年のイギリス、帝国、そして世界』(中村裕子・土平紀子訳)法政大学出版局、2016年。
- 61) 生越・松本訳、昭和堂、2009年。
- 62) 中山千香子ほか訳、作品社、2011年。
- 63) 水田洋監訳『国富論』岩波文庫、三、2001年、235頁。
- 64) さしあたりロバート・スキデルスキー『なにがケインズを復活させたのか』(山岡洋一訳)日本経済新聞社、2010年、45-46頁を参照。
- 65) 永井大輔訳、白水社、2014年。

- 66) 中谷武雄「新しい知のあり方を探る」,『カタストロフイーの経済思想』(昭和堂, 2014年)がこれに注目して、堂目とラフィルの書物と共に、高く評価している。
- 67) ともに京都大学学術出版会。野原は2018年に英文のスミス研究を刊行した。Shinji Nohara, *Commerce and Strangers in Adam Smith*, Springer. 小著ではあるが、内容は包括的であり、書評が待たれる。
- 68) 名古屋大学出版会。
- 69) 篠原久監訳, 守田道夫訳, 昭和堂。
- 70) 京都大学学術出版会。
- 71) 田中秀夫監訳, ミネルヴァ書房, 2017年。なお, スコットランド啓蒙研究, および関連文献としてはロバートソン, シャーとエマソン, そしてポーコックの名著を挙げなければならない。John Robertson, *The Case for the Enlightenment: Scotland and Naples, 1680-1760*, Cambridge U.P., 2005; Richard Sher, *The Scottish Enlightenment and the Book*, Chicago U.P., 2006, Roger Emerson, *Academic Patronage in the Scottish Enlightenment: Glasgow, Edinburgh and St. Andrews Universities*, Edinburgh U.P., 2008, J.G.A. Pocock, *Barbarism and Religion*, 6 vols., 1999-2015, Cambridge U.P. ポーコックの名著はスコットランド啓蒙についても多くの言及を持っており, 特に第2巻~4巻において詳論が見られる。
- 72) Christopher J. Berry, *Essays on Hume, Smith and the Scottish Enlightenment*, Edinburgh U.P., 2018.
- 73) 本稿は自分で確認した文献(書物)を中心に回顧したが, 文献の選択は網羅的ではありえず, したがって恣意性が免れず, 回顧としては限界があることをお断りせざるを得ない。